川柳塔

昭和五十年七月二十五日印刷
昭和五十年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻五七九号

日川協加盟

No. 579

特集・戦争はイヤだ！

八　月　号

姉妹品大和錦印

九櫻

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

柔道衣
剣道具

早川繊維工業株式会社

大　阪　支　店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電　話（779）1690～2番

暑中お見舞い申しあげます

季節料理・折詰

大萬

大阪市阿倍野区松崎町
TEL（623）5031・5032
南区畳屋町三ツ寺センター
TEL　（211）　9184

喜寿を迎えられた生々庵主幹と小石夫人

中島生々庵

高知大会の帰途

愛妻の碑　老妻と仰ぎちと眩し

日曜市　人間の子までは売ってなし

竹林寺　芭蕉の句碑の苔厚く

土佐っぽの面影うすくネオンの灯

私の喜寿

喜寿愉し緑の夢は舞い狂い

野迷路氏を悼む

本社同人の中での年長者であった福井野迷路氏が亡くなった。海軍々医中将であったこと、東郷元帥の主治医として臨終を見護ったこと等々の閲歴は幾度か本誌にも記事になったり、又本人のエッセイも時々拝見して居た。本誌10周年記念句会には元気に出席して居られたが、今年になって殆ど病床にあったため句会でもお目にかかれなかった。それでも句会の事が気にかかって、毎月の定例句会の日時を電話で問い合せて来る。勿論いつも案内の通知は差し上げて居るのであるが、編集部を電話に呼び出してお尋ねになる。了解了解と電話は切れる。暫らくすると又電話がかかる。同じ内容の電話である。そういう事が今年の初め頃からのことで、あの頑健な躰、回転のいい頭にも、その頃から所謂老化が表面化して来たのかと、今にして思われる。それにしても川柳に対する情熱は最後迄続いてご臨終の枕頭には「川柳塔」が積まれてあった。嗚呼。

座右の句

飲んで欲しやめても欲しい酒を酌ぎ　（葭乃）

私の句

メモ帖に今日の句がある主婦日記

伊藤茶仏

川柳塔八月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

野迷路氏を悼む……中島生々庵…（1）
空気人間への道……若本多久志…（2）
誹風柳多留廿五篇研究……（七）……（26）
清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮
鈴木黄・室山三柳・入江勇・岡田甫
川柳塔（同人作品）……西尾栞選…（4）
水煙抄……菊沢小松園選…（30）
麻生路郎物語……（8）……東野大八…（23）
秀句鑑賞…（同人吟）……浜田久米雄…（28）
…（水煙抄）……三井酔夢…（29）
近作……諸家…（55）
百人一首と川柳…（14）……冨士野鞍馬…（46）
愛染帖……橘高薫風選…（44）
一分間の柳論……北川春巣…（65）

空気人間への道

若本多久志

路郎先生の遺句の中に

さて誰も来ぬと寂しい元首相

という時事吟がある。これは、日本が有史以来初めて、異民族に支配された被占領時代の混乱期を切り抜けて、今日の日本の基礎を作った、時の首相吉田茂がその現職を退いた直後の心境を推測されての作品であるが、内閣であれ、団体や企業などでも、その長として君臨し従横に指揮をとってきた者が、自己の意志であると否とを問わず、第一線の現職を引退した時は、長期の労苦から解放されてホッとした気持と同時に、押し寄せる惜寂感はたとえようもないものであるらしい。

私も、古稀を迎えた時、感ずる処もあり、かねて計画していた余生の夢を果すべく、一昨年五月から第一線を引いて、会長という閑職に就いたが、最初、二三カ月は、何かサバサバとした気持で心うきうきと旅行、作句、読書、雑文の執筆と、今まで仕事に打ち込んで情熱をそのまま続けてゆける充実感に、楽しい日日がつづいたものである。

処が、七八カ月たった頃、ふと私の胸に

戦争はイヤだ！……（同人特集）……（36）
本多柳志・野村太茂津・原田明春・傍島静馬・島居百酒
福井野迷路先生告別弔辞……中島生々庵……（48）
野迷路さんの思い出……山川阿茶……（49）
亜鈍の謦語……藤村青一……（43）
渡米の成果……本田恵二朗……（50）
信州から……金子呑風……（50）
初歩教室……本田恵二朗……（54）
大萬川柳「疎遠」……川村好郎選……（56）
柳界展望……（58）
本社七月句会……（庸佑・整理）……（64）
各地柳壇（佳句地10選）……高鶯亜鈍……（72）
「氷」……山根白星選……（52）
一路集「夏休み」……小西雄々選……（52）
「観光」……臼井三林坊選……（53）
編集後記……（一三夫・葉子）……（77）

座右の句

夕映えへわれ恋をすと叫びたく　（勝亀）

私の句

半分はきこえてほしいひとりごと

遠山可住

「これでよいのか」という一抹の不安と寂しさが湧いてくるようになり、それが一日一日と募るばかり、さんざん考えた末に、従来の仕事には半期毎の決算があって、傾倒した情熱の効果がはっきりとバランスシートに現われ、何とも言えぬ満足感を味わえたもので、今はそれが無くなった為の、不安と寂寥感だと解った時、愕然として、又もや思い上っていた自分に鞭打つはめになってしまった。

そこで、先輩である同業会社の会長さんにこの心境を打ちあけて伺った処、

「忌禅なく言えば、君はまだ人間が出来ていない。企業の形態によっていろいろ会長の在り方も違うが、中小企業の会長というものは空気のような存在でなければならない、かけらほどの功名心も持たず、常に瓢々とした姿を社員の前に顕示するだけで、自余はすべてを忘れた悠々自適の生活に没入する。それでこそ名会長と言えるのだ」と教えられた次第。思えば、自分が常に座右の句としていた

寝ころべば畳一帖ふさぐのみ

という路郎師の句の中には既に前記の教えが充分に含まれていたのではないか。愚かにもそれに気付かなかった自分を哀れとも感じて、慚愧に耐えない。

今はただ、畳一帖の句意を胸に、空気のような人間になる努力を続けているが、なかなか難かしい自分との闘いではある。

捨てるものまだ捨て切れず凡夫たり
覚っても悟っても海の深さ哉

川柳塔

西尾栞選

バランスを崩さぬ苦しい嘘一つ
パントマイムの夫婦は愛憎既に越え
見捨てられた大根の意地花をつけ
虹が消えたあとに別れがあるばかり
赤鬼は怒りっぽいが瞞しよい
青鬼は愛の麻薬で眠らそう

神戸市　小浜牧人

杜子春の夢蛍火のように消え
星の降る夜もはたらく火取虫
雑巾で顔をふくよう誤字当字
鈴つけて猫の成人式である
絵本大好き幼年期の山である
よそ者に口閉ざすべし蛇苺

八尾市　香川酔々

爪切って爪の痛みを何故知らぬ
打率一割　口ひげだけは立派
予報官職場に傘を置いてあり

松原市　谷垣史好

夏風邪が治らぬ地球冷えている
炎天や精子少なき男たち
播但線風も都を落ちて行く

竹原市　山内静水

大じょっき女だてらと言うなかれ
パッタリと視線憎しみ消えていた
そもそもが頭にきていた話し合い
社運隆々飼いならされて株をもち
金の要る話しになって抜くビール
腰すえて電光ニュース読むも旅

大阪市　吉田圭井堂

銀行の貸し度い店は言うて来ず
わが棟を蜜蜂に似て間違えず
送らせて来たあの頃の妓を想う
扨て土用梅の干場もない団地
どさくさに桐の柾下駄替えられる
高千穂でいいのさ夢も謎もあり

倉敷市　小野克枝

食パンがきれいに焼けて仲直り
幸福になりたい尺取虫になる
飼犬のくしゃみクーラー止めさせる
石地蔵わたしも動けないのです
成人の着物が要ると言い始め
細腕へ栄養過多がぶら下り

宇部市　平田実男

ゴキブリもなめくじも出ぬ淋みしい日
小さく切り過ぎて西瓜の味がせず
正直が勝つ例仲々見つからず
青春に悔ありあの時あんな時
末は恐ろしいと親馬鹿だけ思い

八尾市　宮西弥生

鍵ひとつ女を守る四面楚歌
青春の悔いを中年もがいてる
冷蔵庫へシワ寄せが来るレモン買う
身を守る女に鍵は一つです
捨て石のこころにもあった善と悪

大阪市　金井文秋

フイルムを逆に廻してある見せ場
貰うたら帰りたい孫嘘がない
二代目の個性に変るインテリア
高血圧へ効くと云うのが多すぎる
セロテープと紙でいつまででも遊ぶ

島根県　堀江正朗

音雑多　味方の音や敵の音
いさかいのもとは天ぷら跳ねてから
雀の子達者な声で前を往き
妻の愚痴往診鞄に入れて去に
晩酌を酌ぎたしてから改まり

富田林市　岩田美代

考えを真せば目に入る花菖蒲
紫陽花の心の彩を聞いてみる
字に書けばみじめさいつそ深くなり
今日が嫌いで日めくりは明日にする
御詠歌の扇子に老女のしながあり

大阪市　川口弘生

自分から刺しには来ないバラのとげ
あじさいの今日咲く色も嘘でなし
日本の女　美わし四季を着る
逆てる柳眉　剃跡と喰い違い
向日葵の私は私の道を行く

宝塚市　傍島静馬

長男をおっとり育てた覚えなし
父だけが父の日ちゃんと覚えてた
散髪をしたけどアタマ冴えてこず
百面相孫泣かすとは知らなんだ
雪月花何んでもこいの飲み仲間

倉吉市　奥谷弘朗

気疲れをほぐしてくれる妻がいる

野心でも無いと活気の湧かぬ性
恐いもの知らぬ意欲も消えかかり
一筋に打込むものを持てる倖
核心にきて人柄がものを言う

桜井市　岩本雀踊子

少し阿呆になると住みよくなりました
面白く生きたい女の中ジョッキ
他人に近い言葉を持つ身内
産卵の海亀かえる子と信じ
残り火のぬく味と持ってる白毛染

松江市　中川晃男

設計変更ばかりでボクの青写真
子の謎へ母さんまたもひっかかり
母として生き　女として逝き
生きてゆく空気に値上げはないものを
金庫開く　閉ざす　中味は他人のもの

倉敷市　水粉千翁

蟻が引くとき大きさの謎がない
なんとなくもれて夫婦の話です
もっともな話妥協はしていない
友情に色あり白をぬりつぶす
水入らず夫婦は雨の音に濡れ

大阪市　不二田一三夫

某月某夜　バラを咥えて寡婦踊る
風ちょっと吹けば別れ別れになる雲か
美容体操尺取虫に教えられ
貧乏は野良犬にまで吠えられる
枕べに10円遺した貯金帳

青森市　工藤甲吉

万物の霊長金に使われる
生きているものの姿よ四苦八苦
大正の頑固はやはり明治寄り
天覧のこの一番に尻をつき
蝶蝶の聖なるもつれ風光る

西宮市　島居百酒

憧れがとどかぬ虹で美しい
空き缶がこんな茂みで妖しまれ
無産者の気炎は隙間風に似る
地下街で地震説が歩を速め
保守系であるから自民へ腹が立ち

香川県　三井酔夢

偶像を探し求める旅続く
遠い子の電話で父の日も終り
娘の歳に恋したなどと言うものか
姑は留守　開放感はなんだろう
ロッキングチェアで逢うた昼の夢

東大阪市　落合思月

招かない客へも素直な自動ドア
行きずりの恋をしっかり握りしめ
ストすれば食えない居職の灯を下げる

控え目に生活して近所にさげすまれ
紋付の遺影へ誓って出る受験　高槻市　若柳潮花

背を向けて酒の匂いをさけて寝る
五月雨へ地下道までの送り傘
鶯は姿も見せず振り向かせ
白鳥へみどりの影を落す城
遊歩道単衣の衿へしのぶ月　氷見市　関美子

せわしない世すぎ眺めて風見鳥
夕映えの浮巣ここにも核家族
振り向けばはや中年もいいところ
着てくもんないからあんた行って来て
蟹族の会話声高舌短か　藤井寺市　児島与呂志

歩行器がテレビにせまる掴まえる
言い訳のいらなくなった老夫婦
姑を本真に叱る妻でよし
お隣りのバラの大輪今朝もほめ
パンジーが好きネグリジェがひるがえり　大田市　藤田軒太楼

世直しの駒からひょうたんとはゆかず
先方に理あり話しが違いすぎ
中傷を意とせぬ程の知己の仲
深追いをして世の嘲笑をかい
さしがねの出どこ妻だと察しつき　東京都　山根白星

新しい母に知ってるかげひなた
一匹の佝僂書斎を檻となす
佳人へふり向かず諦観が先に立つ
儀杖兵めいて勤続賞貰う
山の夜気入り込む雲のかたちして　兵庫県　遠山可住

下宿の灯君の便りをまた出させ
下宿の窓向いも巨人阪神戦
下宿の子下宿の父とうま合わす
故　永尾英断へ合掌
まだ君が要るのに君よふり向かず
冥福を祈る瞼に君死せず　八尾市　大路美幸

髪染める朝　梅雨入りが報じられ
桜桃忌近づく　額に風の音
花有情　明日の実りを知らず散り
偽善者のビラがちぎれて梅雨半ば
インスタントが好きで鬼にはなれません　和歌山市　小川佐知子

肩書きが二人の中へ割って入り
札束に弱い女のピエロ
方言に旅情ほのぼの能登の海
傷深く残し他人の顔でいる

コタンの火燃えて哀しき観光地

三重県　川上大輪

ふる里を捨てた女の爪が伸び
産院のドアーへ男の手が迷い
やすらぎの一と時子供の寝息聞く
マネキンの色気に負けて買うてくる
借りる嘘貸さない嘘に押し切られ

大阪市　本多柳志

喜寿までの余命を託す聴診器
味読して凡夫を悟る般若経
計算をして香典を包み変え
個人的意見に会議リードされ
ヒナ人形賞めて女　子を産まず

守口市　羽原静歩

てっせんの紫　切紙に似て
胃液薄う薄う三伏の夏にいる
冷奴もう七人の敵はなし
内ゲバのどこまで狂う世の流れ
病んで見る日々好日の苔の彩

尼崎市　黒川紫香

道南の旅

朝霧の濃く函館は汽笛する（函館）
ライラックの影十字架にある光り
石畳函館港は眼の下に
一望に入らず五稜郭緑り濃し
かもめ島ニシン帰らぬ浪を受け（江差）

西宮市　藤村〆女

隠岐吟行

元弘の昔をしのび碑を仰ぐ
一人だけまだハンカチを振る船出

父死亡

日露の勇士今ここにやく煙り
母と子と歩巾揃うている安堵
人形に話しかけたい一人ぽっち

堺市　河股緑水

空へ澄む杉直線のすばらしさ
倖せと思えば足りる箸をおく
噴水の落ちゆくさまよ定年よ
人生の航路で妻は火夫でいる
船宿の明日の期待が眠らせず

愛媛県　渡辺暁童

まける利口を　知ってまけない
人を生かして　光る存在
理づめ筆づめ　酷な論評
三才児の多弁　もて余し気味
寝るもたべるも　テレビ中心

倉敷市　野田素身郎

夏服へ丸味をおびてきた長女
二兎追って二兎つかまえてもてあまし
不況対策会議ぬるい茶が一杯

激文の誤字グループにあるあせり
握手しながらどちらも次の策をたて

八尾市　高杉鬼遊

カレンダーに八月がある日の痛み
合唱へかえるは遠慮などしない
費うからなくなる金の面白さ
逢いそびれ無沙汰がちなる梅雨しとど
女部屋背広を吊ってつらくなる

広島市　林野甦光

混血の歌手に楽譜を持ってかれ
美しく別れた後で腹が立ち
騙されぬ山彦であるどもり癖
ネオンの下の雨宿りとはわびし
充当しますと勝手に金を取り

神戸市　仲どんたく

指切りで別れた夜からそのまんま
一人飲むグラスへ鸚鵡　馬鹿と云う
盃へ　明治　大正　昭和　溶け
又今日も暮しに負けて逝った記事
金婚を私のえらんだ人と生き（M氏へ）

大阪市　中川滋雀

若狭路（二句）

美山路の過疎を堰止められぬダム
嫋嫋の余韻を旅の傘で受け
十枚目のお札は別れの音で読み
ささやかな幸　小瓶に宵を抱く
言外の含みに小さな灯をともし

鳥取市　河村日満

ふと妻が逝った夢みた涙あと
年金の暮しにも妻預金欄
所得税つくづく二人きりわびし
父の顔はっきり今朝の夢うれし
掃除機の個性男手にも馴れる

鳥取県　鈴木村諷子

そんなこと言った覚えはないと言う
女房と美人に座席はさまれて
たのしげな夕餉はスダレ透けて見る
几帖面な性で人にもうるそうて
少女もうものの哀れを知りはじめ

伊丹市　小川静観堂

孫の手

ボクの手より小さいのネと孫笑い
繋がれてばかり居る秋田犬五月雨るる
旅程ちょいちょいかわり旅たのし
地球儀の一点僕の原点か
頬ずりを受けてほしい夢二の絵

大阪市　神谷凡九郎

何故生きているのか神様として来た約束
馬鹿で良し私を護るのは私
雑魚も魚さ僕も君もやはり人

影のある女で女らしう居る
プロポーション振りむかないでいてほしい
岸和田市　高橋操子

肩組んで唄う明治に光るもの
その時季のおす猫食べにだけ帰り
筋書きが読めてひるまのテレビ消す
心中した母へ冷たい世の批判
何をする人ぞ高級ばかり買う
島根県　小砂白汀

子がついた嘘なら素直にのみこめる
停車場が生きてるポプラ風に鳴る
抱きしめてこれが男というものか
前立腺どこか佗しいひびき持つ
童貞をついに捧げたエベレスト
今治市　越智一水

月のため一本つけよう月に酔い
健康な心が妻を叱らない
耶馬渓にて
碧層々ここでも一泊したいとこ
青の洞門
ノミの音がきこえてきそうノミの跡
洞門に窓ありみどりの風が抜け
米子市　増田竹馬

学歴は無いが一本通る筋
保証判妻の視線に手がとちり
駅弁の魅力が旅情かきたてる
輪島塗の蓋ドッキングして取れず
一病と仲良く四つに組んで生き
大阪市　西森花村

父の日に父はパチンコにも行けず
コマーシャル頭の悪いのも覚え
公僕という甲斐性者ボーナス期
内々は向うも会社更生法
雨　雨　雨　あやめあじさい青蛙
竹原市　森井菁居

人間に丸味がついて病みあがり
健康な胃が青汁を受けつけず
妥協してまだ実印に悔がある
おろかとは言わんが女だと思う
糸垂れたのどかへ政治論はよそう
大阪市　河野君子

父の日も妻はきれいに花を盛り
書道展うす墨色より漏れる呼吸
適令期の娘が振る鈴に絆ゆれ
衣替えミニ穿いてゆく足の冷え
自信たっぷり明日の切符を購うて待つ
岸和田市　植山武助

挨拶の言葉も決って来た暑さ
印相をまともに考えたくなる貯金
昨日まで断る積りが又崩れ

花嫁の父の涙は許される
さしあたり妻は我が家の調停委

大阪市　宮尾あいき

父の日を父の無い子と墓詣
お早うさん九官鳥に先越され
月見草月と同じ色で炎え
残り火をかき立てて血圧があがり
百円も良し銭湯のしまい風呂

松江市　吉岡遞児

拾万円札できても不思議ない世にて
海猫にたつ巻きという殺りく者
爆弾魔以来隣りへ気を使い
質問はこの件だけでない世相
バイタリテーは兎も角耕機購う元手

竹原市　三宅不朽

何気ない言葉に角度あるベッド
ひとの訃よ人恋う眉をしかと張り
母と寝た記憶の中にいる生毛
凡鐘の余韻達者で母在す
白バラの不安暮色へ昏れのこる

八尾市　高橋夕花

おおげさに牡丹崩れて昼の夢
花菖蒲氏なき人の氏にふれ
紫陽花のその日その日の出来ごころ
日傘ひらけば容るす心になってくる

本の重さに父の重みを知る書斎

松江市　柳楽鶴丸

割り切って遊ぶつもりで出たけれど
妻は妻遊びは遊びと割り切れず
父の日に日本に父がいない
野鳥保護弱い野鳥にしてしまい
職業婦人に生きます泣くのは嫌やだから

松江市　小林孤呂二

分の悪い話へ煙草はけむるだけ
父の日の父は汗にまみれてた
利に動く人の椅子さよく廻り
あきらめる鳶は鳶の子に育て
敬遠の四球を喰う日の渇く喉

堺市　河内天笑

鬼はひとりで鬼の役目を考える
にんにくのたれに映ったつけまつげ
時にはさかろうている聞き上手
ギャンブルに麻痺したはだか銭をみせ
正確に僕をとらえて来た世間

富田林市　板尾岳人

山小屋で永い手紙を書く男
吊橋をゆすると流れ速くなる
吊橋を渡ると緑に抱きつかれ
雪渓を過ぎると汗は喋べらない
天気図を見ている男山へ来る

大阪市　有信新之助

サウナへは付合いかねるあばら骨
先週の不摂生を知る山の息
退化した足にもう一と山が待ち
鑑賞用にあらず鉢に茄子が生り
船頭二人でわが家漂流中

大阪市　大坂形水

素人の恐さ知らずが儲けとり
棒折って戻り会社を悪く言う
慶弔へ結構多忙市会議員
突っ返しもできず貰っておく中元
一流のプロを子に持つキャディさん

堺市　藤井一二三

旅の句（伊豆天城）

踊り子の涙か雨の天城越え

お吉の墓遺品展（下田）

幸うすき運命に濡れた袖のしみ
その昔見捨てたおんなで町は食い
廻り止む自由を独楽でさえも持ち

大阪市　福井多蘭子

食堂風景（一句）

婦人年女豪勢に喰べている
散策へ思わぬ史跡にめぐり会い
禁酒して何年延ばす命なる
漢薬のブームにのって馳け廻り
散歩道緑と対話の刻楽し
相合傘好きも嫌いも寄り添わせ
ちょっと手をのばせば足りる部屋住まい
人の着る流行もくもくと縫う縫子

大阪市　西出一栄

大東市　土岐トク子

顔見せぬ教え子案じるクラス会
お姑さんと呼んで足踏みする甘え
培った歳月今日の顔でない
ホドラー展ひとあらためて思う今日

岡山県　嘉数千代香

悔いはなし踊り疲れて来た影絵
妥協せぬこころへ影が立ち止まる
けしの花罪の深さの彩で咲き
今日の風今日の風車が廻る

岡山県　直原七面山

遊びの筈が恋の虜に
聞えぬ振りも損をするから
湯の街の穴場を探している二人
悲しさを女は泣いてまぎらわし

藤井寺市　西いわを

青紫蘇へ刺身の色が浮き上がる
人間は神と悪魔を抱き合わせ
大小はとわず五弁の花ひらけ

義兄の死

甘いもの喰べすぎだったと灰が云う

神戸市　中村ゆきを

智恵寺と聞いて子供とひき返し
先生の耳輪が明治のかんに触れ
青春に賭けるものなく暴走す
葉裏から地球をさかさにかたつむり

富田林市　和田維久子

現実をしばしはかない夢とする
佗しさに無性にむしる草の丈
老の惑い愛のことばの重み知る
電話ありだけで日記はとじたまま

東大阪市　竹中肖二

浮世絵の素足に媚びる花菖蒲
日本の梅雨もまた良し花菖蒲
金借りる腹と相談見抜かれる
さつき展推定樹齢の札も古り

東大阪市　竹中綾女

須磨公園観光

菖蒲園花・花・花の背くらべ
真珠貝の苦労は知らず艶を褒め
買わぬ積り崩れて真珠買う女
ショールーム真珠の安さ誇張する

堺市　山本素郎

老いらくの蹉跌なだめる隙がなし
梅雨しとどこれが逢わずに居れましょか

B型の血をたっぷりとわが家の蚊
妻の酌鯨も高うなりました

島根県　堀江芳子

夫婦箸その倖せに馴れた愚痴
影法師さんも心筋病んだのね
そよ風に靡くすすきも人を切る
慰める言葉を自分に言い聞かす

松江市　恒松町紅

ためらわず川は汚れた海へ出る
家にある同じおもちゃと知らず買い
たまさかに飲める息子と距離に住み
ヘルメット年より若さほめられる

大阪市　黒田真砂

溜息の底に淀んで居る思い
フィナーレ拍手と吐息入り乱れ
心の挫折自動ドアーに見すかされ
完全と云う仲人口味気なく

新宮市　大矢十郎

構え筒そんな姿で弾くエレキ
自問自答ああ飲み捨てのジュース缶
長髪の寒暑に耐える姿かも
傷口を見せられ見舞言い直し

西宮市　若林草右

欠伸にも一ふしつけて待ちわびる
あの世へのお土産となるノーベル賞

馬の骨弥生の土で見直され
どこに住めよとか住民税の上りよう

和歌山市　内芝としよ

山の幸背負って帰るハイキング
パンタロンはいても優雅な氏育ち
石段の一つ一つへ願いこめ
器量よく生れて皆より嫁き遅れ

岡山県　白岩文衛

出張で来た総会を寝てばかり
抜けたとこだらけの上役抜けてない
方円に従い水の淋しい日
スカッと忘れろとエラーの尻たたく

岸和田市　福浦勝晴

定年が何サは妻のジェスチュア
正しいと勝手にきめてビル爆破
長髪の息子のバンドのないズボン
夏燃える燈台カッとその白堊

倉敷市　松下梁水

日々多忙なのに皮肉な勇み足
視野無限そんな息子に託す夢
仕返しへ兄貴は一つ余計蹴り
土壇場に来て神様が信じられ

堺市　伏見茂美

焼石に水そんなお金も無い暮し
心せまき人に宗教すすめられ

近所のごたごた三猿は鍵をかけ

転宅

もう一部屋口ぐせ建売に住んでみて

島根県　松本昌

心乱れる日傘蔓薔薇にひっかかり
添加物知らぬ明治の人強し
母子草咲く古里に人が減り
糟糠の妻と昼寝を倖せよ

大阪市　江城修史

砂をかむ思い主語なき人と座し
裏切りを飾る背広と言う鎧
ほんとうは淋しい男の饒舌よ
言いよどむ言葉を抱けば胃が痛む

島根県　榊原秀子

野薊の棘にこころを問うてみる
正論をぶちこわしても立てる意地
歯こぼれの言葉かえらず悔を生み
人生の幕開く佳き日の乾盃や

和泉市　西岡洛酔

嘘の恋塗って女の旅を出る
病床の願い素直に鶴が折れ
老妻がこんなにはしやいだ旅の窓
明日のカルテ善人として過したし

松原市　玉置重人

父の日に酒ふりかけようか父の墓

五十坂本気あっさりあしらわれ
折角の旅が幹事として疲れ
真実を聞きたい油断も隙も見せ

平田市　久家代仕男

温顔に宿命秘めている苦労
蜘蛛の糸　所詮　自縛の糸と知り
脚力もおんなごときに追い抜かれ
婦人年農婦にむなし響きもつ

大阪市　山川阿茶

酒ぐせに恩師人間性を出し
八方破れを恩師とうから見抜いてた
親に似ずハムレット型の子に育ち

絵画展

おぼろ気に残る記憶の浪花の画

岡山市　川端柳子

自画像に逃がしてならぬ片えくぼ
耳ぴんと立てよと小犬に言い聞かせ
バラ笑顔　真顔　童顔皆揃え
バラ渡る風とりどりのバラの彩

京都市　都倉求芽

ジャンプするには余りに足もと柔い
一番になっても秀才落ち着かず
くしゃみしてから残りの半分笑い足し
われながら下手な嘘です電話口

岡山県　池田古心

荒壁のまま年輪に限度が来
明治の規約まだ生きてると明治ごね
入れ過ぎた世話の愚さ自嘲する
狭き門親の安堵へ途中下車

大和郡山市　森田カズエ

雨占い下駄占いも雨とでる
父性愛言葉少くなに向い会い
少年のファイト黒帯締める夢
山の辺の地図野仏と歌碑の道

奈良市　宮口笛生

一番いい季節をイチゴに追われてる
屈折の人生つつがなく続き
爪染めて娘大学一年生

永尾英断急逝

オイと云いそうな遺影へ香をあげ

美祢市　安平次弘道

女は画布　男の彩を待っている
そろばんのしめり不況と梅雨空と
口説かれるスリル戻れぬ距離にいた
指一本相場が違う泣き笑い

仙台市　川村映輝

苦を知らぬ者に倖せ解らない
エプロンをつければママゴンとは見えず
生活保護当然のこととして悪るびれず
妥協せぬ鏡に怒りぶちまける

笠岡市　松本忠三

野良犬の横断右を見左を見
改修工事予算半ばで雨期に入り
通話料孫は容赦なくしゃべり
送別の辞へ仲居までかしこまり

豊中市　戸田古方

虫一ぴきはわせて朝の卓静か
花柄のポット日記を書き残す
時速一キロという生活に落ちつけて
肩肘を張らずに生きて淋しいね

和歌山市　野村太茂津

自我捨てて藉す身へ汗の美しき
夢の灯へ運命なんぞ委されぬ
やりくりをつけたら俺が消えている
宿命のどう流れても水は水

鳥取市　大塚豊生

大掃除忘れた紐を解いてみる
友一人救う助言を遠慮せず
停電の闇へ子の弾くギター鳴り
蜆貝バケツの水に安居する

大阪市　天正千梢

仏教に手を染め喜びを蓄積し
無作法を表看板にした友であり
調子に乗って脱線くりかえし
重心が上になりすぎて狂いかけ

竹原市　時広一路

昨日今日明日へ希望繋ぐ海
胸張って歩けば歩巾広くなり
雲の峰迷わずピント合わせてる
真相を知らない人がいて喋べり

岡山県　出原敬一

忍従の土間ほの暗き文化財
手に入れた古書殊更の茶のうまさ
宮仕え咽喉でおさえた荒い文字
廻し読みやつれた姿で戻って来

高槻市　福田丁路

汽車ポッポポッポポッポの旅日記
御先祖の汗が滲んで土が映え
土の香が野良着に浸みる五月晴
口笛が喘ぎに変る野良仕事

守口市　野呂右近

夢とても不吉な地図は描くまい
ハミングで半ば胡麻化すプロポーズ
旅先で受話器嬉しや孫誕生
亡き姉に似た人を見てゆずる席

尼崎市　高津徹也

無垢すぎる瞳の射る所少女の秋
鎖とかれて不自由がなつかしい
喜怒哀楽の光あつめて聖書の厚み
ひるまぬと君の瞳は云う胸は云う

悔いたとて所詮俺の子お前の子
牽制へ承知でかかり無難なり
一尾だけ釣ってこれでも鮎ですぞ
ゴルフ焼け鮎釣り焼けに社は不況

出雲市　原　独仙

待たされる部屋で裸婦の額に燃え
左遷されていくのに万歳して送り
娘もう待ったが聞かぬ仲となり
残業を信んじた妻に合わす顔

諫早市　原田明春

流行はその逆を行き逆を行き

名古屋市　吉田水車

第十一回大陸川柳人同窓会、於広島

厳島潮の満ち干は今もなお
小田夢路師の墓碑の裏に自句を刻む
愛吟をかかえて眠る夢路の碑
平和公園
ケロイドは癒えずまた来る原爆忌

大阪市　河井庸佑

どんじりが逆転劇を夢に見る
何くわぬポーカーフェイスにひっかかり
根ほり葉ほり転校の児尋ねられ
修学旅行寝れなかったのも楽し

柳井市　弘津柳慶

じいちゃんの顔を無視して大あくび
炊事引受け町内会へ妻を出し
耳鳴りへここは海抜千米
泣いて来た妹へ兄の義侠心

堺市　高橋千万子

相談にだんだん言葉荒くなり
私のこと私に答え出ず終る
新茶なり女銘酒のようにほめ
千円の価値を話して母のぐち

大阪市　本間満津子

そうであろそうもあろうと鼻をかみ
久しぶり会えばどちらも総入歯
お祖母ちゃん今年も自慢の梅を漬け
円満で仲人さんにごぶさたし

大阪市　神田秀峰

お役所の書類は印鑑やたら派手
売ってやる態度店員値上げ前
借金が出来たら利子で亦ぼやき
ヒッピーもお寺詣りに掌を合わせ

橿原市　岩井本蔭棒

女王さま同じ汚染の空気吸い
文庫本星一つとて侮れず
悪口もアイデアが要るプラカード
播いた種より捨てたのがようあがり

岡山県　竹内翁童

あっけらかんと前言ひるがえし

脱サラの出ばなをくじく不況風
あじさいの哀しさ雨に媚びて咲き
思案にくれるブランコにゆれてみる

岸和田市　葛城伊三郎

千言の辞よりも無口の慈悲に泣く
井戸と塀残して家族音を断ち
遷る世へ今年さつきのよう流行り
ストをして騰げてレジャーでパアになり

大洲市　堀内暁風

風呂敷に紐まで足して包む欲
アルバイト馴れぬ手つきの包装紙
失言を冗談にしてことがすみ
長生きも淋し友の訃昨日今日

島根県　錦織文子

百万ドルのスマイル投げてクイン去る
爆破魔へ親子の和みふり返る
もめている顔とは別な顔で出る
嫁に注ぐ愛いとしかり二十二才

大阪市　室谷徹舟

京の町エリザベスさんきはったで
メーデーの列羨ましし我無職
ベトナムへ米の点滴無駄だった
コースターおじいちゃんが音をあげる

倉敷市　稲田豊作

弥高山開拓村にて（一）

敗戦に泣く松籟の山深く
道ぶしん子々孫々の道開く
カンテラの山からネオンの灯が霞む
山つつじ全山染める日の葬儀

倉敷市　藤井春日

正直に生きてお世辞さえ云えず
兎もかくも阿呆や出来へん太鼓持ち
コーヒー一杯で別れ話を持ちかける
正論を吐いて自滅の道を行く

鳥取市　両川洋々

家計簿の悲鳴が妻にだけ聞こえ
非番日の父を気使う音で掃き
四十ぐれの例えいくつも恐く聞き
風紋よ俺が泣く時風も泣き

姫路市　梅谿庵不酔

呉服屋のマネキン湯文字忘れてる
死にたいと言うてて医者を呼べ医者を
貧乏神改名してもつきまとい
熱上げた昔恥かし妻と居る

鳥取県　清水一保

朝露をけって五月の詩が生れ
可憐だと思えど野花を鎌にかけ
太陽を美しく見る朝の路
市街を走り田植を発見し

倉敷市　能登原白水

芽吹くもの芽吹き己を顧りみる
春闘をなかったものにして夫婦
黙々と我が家に運ぶ蟻となる
新築の屋根の光りも俺のもの

大阪市　津守柳信

文句だけ一方通行するも愛
いたわりに馴らされて来た老妻の愚痴
行き先は解らず難破避けるだけ
坂道で緑の風にふと気付き

高槻市　山田季贊

主治医の話やっぱり心に引っかかり
茶柱が真すぐに立ち回復期
他人から見れば気楽にみえる病み上り
ペンだこが無くなっていた病み上り

八尾市　古川鶴声

不況知らぬ国技に満員幕たれる
髪薄くなって女房にはげまされ
生ま返事三面鏡が見るヌード
入れ知恵の通り答弁する外相

倉敷市　小幡里風

実印がものを言ってる以下余白
下積みの声拳にして積み重ね
カーブミラーふと向かえた傘のひと
雑談の中でヒントを拾い出し

東大阪市　斎藤三十四

消えてるつもりの前科ささやかれ
鶯に夜は蛙の鮎の宿
アルバイトの日焼けゴルフかと聞かれ
苔廂今年も来たよ鮎の宿

島根県　大森孝華

定年へまだまだ惜しいエネルギー
新緑へ今日を暮らしの子守唄
お便りの過去と言う字に吸い込まれ
思い出は幼なき日々をもめた友

玉野市　小谷仙山

善人が居て悪人が居て法が有る
これしきのハンマー年は取りたく無いものよ
帰えったら植木が待って居る暑さ
親切へ風が逆さに吹いて来た

呉市　槇田英詩

食堂車大阪広島飲みつづけ
屋台出るとき悪友も時計みる
愚痴を聞くのどには旨いものがなし
ゆで玉子母の味する子の旅行

泉大津市　村上春巳

同席は人の良さそな国なまり
どしゃ降りを幹事がキップ買いにゆく
真夜中にカップヌードル一つあり
僕よりも高い女とエレベーター

小松市　馬場魚山

人形に着せる女の子柄をより
コンパイン昨日温泉に浸った手
日の丸を立てぬが赤旗ひるがえし
掘り立てを賞めて竹の子置いてゆき

大阪市　鈴木生仏

他人の目に幸せそうに見せる親
今のまま生きたくも無し死ねもせず
漫才師君がやめたら僕もやめ

神戸市　佐々木静泉

磨いてもみがいてもただの石やろか
人がいいとこまで人からうとまれる
記念の日またこれからとねじを巻き

和歌山市　吉野冨江

言い負けて後腐れ無いさわやかさ
ねたましい女心に棲む悪魔
思い出も枯れて互いにエゴの顔

今治市　小笠原有里

アドバイス弱味弱味をついてくる
燃え上る思慕人妻の名が崩れ

高野山

霊地今私の足でふむところ

兵庫県　河原みのる

ツバクラの虫無き代ろ田に集い来て
何ンのその蜘蛛の巣破る蝶も居り
大過なく小過はたんと認めます

大阪市　藤田頂留子

此れ位も許さぬ味の塩加減
さからいもせず信号の赤青黄
色変えて何おびえてか花あじさい

大阪市　村山光輪

お酒屋で梅酒をつくる講議受け
招かれて祝詞をのべる年に成り
不景気も他人の事と公務員

唐津市　新岡回天子

先生が飲んで言葉の変な宴
子を連れた雀一番逃げおくれ
中年の色気笑いのうちに消え

鳥取県　森田布堂

慶弔の花環を飾る両隣
梅雨晴れの空に輝く塔があり
義理捨てた票の清さにある誇り

兵庫県　大江秋月

足跡を砂に残して孫帰る
朝昼晩さつきが待ってる僕の足
気の毒なさつきよ農繁期に咲いて

羽曳野市　塩満敏

花時計平和を永遠に刻みつつ
楠の出世は宮島の大鳥居
女と女殺意をはらむすれちがい

大阪市　西川誓二

課長の頭と思い叩く西瓜割り
朝酒が飲めて楽しい湯の宿屋
自分だけ安全信じる交通禍

加賀市　細呂木魯木

定年の空しさ写経する心
赤ン坊と思えば可愛気な老母
忙がしさぼやきながら自慢らし

今治市　原田一風

気の抜けた頃に手紙で詫びて来る
どうしょうも無く人妻が美しい
手に負えぬ子が母となり子を叱る

鳥取県　林露杖

さつき展一葉一花にある位い
八面六臂一言多いのが玉に疵
前進をはかる歩巾を妻ときめ

和歌山市　若宮武雄

傷つけず生きる悟りの柳とも
晩酌の今日が新たな味にする
飛べるから思うところを泳いでる

和歌山市　津田与史

無職という地位に一抹ある不安
早寝早起き無職へそんな癖がつき
割り勘の約束妻はランチとる

貝塚市　行天千代

最後の一人嫁がせて
嫁ぐ朝元気で居てと母泣かす
手の中の珠を取られたむなしさよ
一人寝の広さアルバムなどひろげ

松江市　岡崎祥月

日本へ歴史を残し雲へ散る
支部長の重責老いの血がたぎる
馬車馬に働き日銭あわれなる

和歌山市　沢山福水

白い犬白と呼んだらついてくる
奇形魚も加工へ姿消えてゆき
婉然と明日は裏切る眉を引き

若本多久志

孫三つ既に反旗をひるがえし
清貧という価値観のうら寂し
老いてなお人を観る眼のあやふやさ
欲一つずつ消えて枯淡の境とかや
経営学アメリカさんはもう言わず

尼　緑之助

入梅の時間違えず雨の音
からつゆも平気田植はとうに済み
竹の子は伸び切り皮を半分脱ぎ
マネキンのポリ県道にちりまみれ
神苑の古松はゆっくり根を上げて
四股踏んで八十才へ挑むなり

浜田久米雄

ご自慢のさつきをほめる人が来ず
一物を胸に男はもの言わず
ほどほどにして交際の枠を締め
稲妻に町中の人飛び上り

本田恵二朗

寝不足な顔ぶらさげて旅戻る
妻と娘のはずむ対話に割り込めず
年波に上手に乗って漕いでいる
恋の花三原色に咲く浜辺
良策を見つけたらしい高笑い

正本水客

下北半島

本州最北端の波も入り陽に逆えず
海峡の宿　生ウニの香に暮れる
総ヒバ造り緑りの底にある湯ぶね
巨人海から生れて人の世ならぬ岩の色
奇岩は白緑色に海からの人寄せじとす

橘高薫風

花言葉忘恩もある不死もある
胡座して仏のあぐらより涼し
達筆の無礼図に乗るばかりなり
どう呼ぼうとも情婦には違いなし
海を歩いてふたりで行く日見えてくる
葬儀委員長人形になってよし

北川春巣

税込みでいうても賞与しれている
ベッドタウンのデパート帯に短か過ぎ
ママさんパート背の汗を呆れ合い

T氏還暦

満六十雪折れなしを続ける気

川村好郎

玉造温泉

蟹せせる手ももどかしくひとり旅

梅里年次祭

既に誰供えしか墓花薫る
年甲斐もない妄執を突き返す
大夕焼厳しきものを明日に秘め

西尾栞

タクシーの廓なりしを廻り道
この家並ま昼を通るもと廓
倉庫番海に扉を開け放ち
水軍の根拠地なりし海鼠壁
さりげなく道を訊ねる美人選り

菊沢小松園

風の音女素肌で聞きたがり
さすが明治折目正しき顔で来る
はらからと言う言葉さえ耳ざわり
花時計花は年中咲いている
生字引退職金のことでもめ

麻生路郎物語（8）

―古マントと〝土団子〟―

東野大八

「土団子」第一巻第一号

「雪」は大正六年二月に十九冊目を出して廃刊した。その全巻に眼を通して筆者の眼を捉えた一つのコントがある。〝僕のマント〟と題するもので大正五年一月号（六冊目）に載っている。人間路郎の一面を伝える消息として以下、主要部分を抄録しよう。

僕は冬が来ると、きまった様に叩いたら埃の立ちそうなマントを引ずり出して平気な顔で着て歩く。以前はみっともないと思って、押入に突込んでおいて夜遅くか、余程寒い時でなければ着て歩かなかった。それがいつか昼間でも平気で着て歩けるようになった。

このマントは、僕の死んだ親父から兄へ、兄から僕へ譲られたもので、親子三代に仕えてよく忠なるものである。僕がまだ小学校の門を潜っていた十幾年の昔、島之内あたりの名もない洋服屋で進水式をしたのがこのマントである。なんでもある人のつてで羅紗を安く買って貰い、洋服屋で五円ばかりで仕立てさしたのだと思う。その時分の親爺は、ある合資会社の一番番頭で月給は僅かだが相当広く交際していたので、会計はとかく足らぬ勝ちであったらしい。それでも遊び好きであったから自然、着類の方へは手が届かなかった。マント代の生地・仕立料三十幾円はそんな苦しい会計から支出されたものだ。

以来、マントの冬が幾度か巡り巡った。明治四十二年の夏、大阪に未曽有の大火があって間もなく親爺は脳溢血で亡くなった。引続いて人のいい兄が戸主になったので、自然マントは兄の手に移った。兄はその後、萩の茶屋の郊外に安い家を借りて会社員生活を続けていた。西風をまともにうけて、毎朝葱畑を抜けていく兄は、いつもこのマントにくるまっていたが、会社を退いて自分で商売するようになってから、殆んどマントの必要がなくなったので僕に呉れることになった。

兄でも僕でも段々と親爺に似て、背はすらりと高くなるし、肥っていた肉は自づと落ちてしまったので、寸法の上からは左程見苦しくはなかったが、さて貰ってみると迷惑でもあった。その頃の僕は高商出のチャキチャキで、ひとかどの青年紳士になりすましていたんだもの、月賦の洋服やオーバーコートは着ていても三十年式の古マントは御免蒙りたかったのだ。

それからの数年間は僕の野心が東京へ走ったり、大阪へ舞い戻ったりして夢の様に暮らしていた。幾度か病魔に翻弄されたのもその間であった。それから結婚もすれば金銭問題の苦痛も現実に知るようになった。そうした

僕の身体をしっかり抱き締めて僕の心的革命を助けてくれたのはこのマントであった。僕は毎日平気な顔で旧世紀のマントを着て歩くようになった。僕に第二の心的革命が起った時分には、僕は一人の子の父になっていた。この調子では僕に二人の子ができることがあってもマントの新調はとても賞束ない。僕は天の恵みの甚大なるを想いこのマントに深く感謝している次第である。

「土団子」が「雪」にかわって発刊されたのは大正七年六月である。上質アート紙八頁からスタートした「雪」にくらべ、こんどは新聞用紙のザラ紙二十四頁、いかにも「土団子」らしい体裁である。同人は川上日車、斎藤松窓、松村柳珍堂、服部ふくべ、麻生路郎の五人。表紙は小出楢重画伯描く二色刷だ。

創刊号目次を眺めると「雪」同人だった藤原游魚、兼崎地橙孫、宮林菫哉の作句には、ゴシックカッコ入りで(俳句)。路郎ら五人の作品にはこれもいちいち(川柳)という肩書のカッコ入りである。「雪」誌上には全くみえなかった川柳の文字が、正面切ってここに登場する。かわりに〝新短歌〟の文字はカケラも見えない。本文のはじめに掲げた古マントの感触を、角張ったゴシックの川柳の文字の底に感じざるを得ない。「高商出のチャキチャキ」が「心的革命」の第一次試練に精神陶冶され古マント(川柳)に還る象徴とも受取れぬこともない。

新柳誌「土団子」の誌名は、六厘坊が「葉柳」を創刊する以前に発刊した同名の柳誌(一号で廃刊)を路郎が復元したものとみられる。(葉柳=第三巻九号にも〝土団子〟の標題で六厘坊作品六十二句が掲載されている)

「土団子は六厘坊の句および、彼の想い出を載せる目的で出した。これは丁度トルストイ研究の雑誌があるように、六厘坊を研究しまた彼に関する材料蒐集に資するためであった」(山雨楼メモ)

余談だが、右のメモの中に出てくる「トルストイ研究」は大正五年九月創刊号を出し、大正八年一月終刊号で閉幕全部で二十九冊。ロシア文学研究家を中心に、大正文壇を担う作家がすべて網羅されていた異色A級文芸誌であった。

この本が出た大正五年は、第一次大戦勃発の三年目にあたり、ロシア十月革命の前年で経済界は戦乱の余波をうけて利権あさりに狂奔していたが、同時に大正デモクラシーが国内において頂天に達しようとした頃である。白樺派の理想主義が世間の注目を集めたいわゆる民衆芸術の台頭期である。その時点で思想家トルストイは人道主義のシンボルであった。路郎らがこうした文芸誌に着目したことは、いかにも彼の青年期を抱きかかえた往時の文芸復興期が、ロシア文学を焦点づけて推移していたかがよく看取されよう。もっとも彼の場合、六厘坊がトルストイであったわけでもないが、「土団子」には翻訳ものの〝トルストイの家出より臨終〟までをのせ、センケーウィッチの短篇を収録するなど、路郎のロシア文学への傾倒ぶりがうかがえよう。

だが、そうした「土団子」も結局、四号をもって終刊する。時に大正七年十月。この辺で「雪」から「土団子」で再スタートした作家としての路郎の気組は一体どのようなものであったか、その創刊号の巻頭の言葉を要約してみよう。

▼青い玉は静的である。池の中の水である水底に沈澱せる黒い土である。その土に圧せられた朽葉である。彼等は遂に自己の流れ行く運命をさえ知らないのである。

▼赤い玉は動的である。天上に燃える太陽である。世にありとあらゆるものを焼かんとする火である。この故に頗る危険である。然しこの危険のない処に真の革命はない。(中略)

▼宝暦明和の川柳は、この意味で青い玉である。完成した芸術である。江戸趣味の謳歌者は青い玉を憧憬して現代に死せんとする。

▼赤い玉は未完成の芸術を完成した芸術にしようと努力がある。どうしたらこの芸術を完成さすことができるかという煩悶がある。

▼ここに我等は青い玉の上に赤い玉を建設することを宣言する。わが「土団子」は、柳界の平和を打破して、新しい川柳王国を築くために放たれたるピストルの一弾である—路郎生。

このような意気込みの中での路郎作品とはどのような傾向か。同誌創刊号に〝須磨雑観〟と題し、一句三行組で新作十一句がある。

○

ひるのふろ
あを葉のかげの
おつところ

○

いいたいことは
風に吹かせて
海へうみへ

○

右のようなスタイルの句で、「土団子」四冊に計三十八句を発表している。

—**手紙を書いていれば朝顔の花**
—**よくきてくれましたと髭がのびている**
—**泣き顔をみせずお茶漬だけは食べ**

以上の路郎作品は、いわば「雪」の新短歌後遺症？ともいうべき傾向のもので、後年の彼の作品系列からすればとるに足りない句が多い。

「土団子」は菊判24頁だが、これが廃刊の直後の大正八年六月、路郎の印刷発行人で「後の葉柳」が出たが、厚紙二つ折四頁の一見ハガキ通信を拡大したような体裁のものだ。その創刊号に川上日車が次のように書いている。

「ゾラは自分の書いた物に自然主義という名をつけていた。そして其主義のもとに自分の作品を公にしていたが、了いには主義そのものの為に束縛されて、終りに書いた二、三部はごく窮屈な物だったさうである。私は遂に窮屈で終ったゾラ其人をほんとうの自然主義であったといいたい。

私等がかつて雪という雑誌を出していたのもやはり主義の為であった。それから雪を廃刊したのも主義に縛られて動きがとれなくなった結果である。この頃ではこう思っている

—人間は余り主義とか、主唱とかは持たない方が結局、世の中が大きく渉れて面白い。少くとも自分だけは自由である。けれども主義のない行動は往々、動かされ易い欠陥が生じる。それさえ気をつけていれば、主義なんかはこしらえぬ方がよいかもしれぬ。

元来、川柳に主義はない筈だと思う。川柳そのものが既に大なる主義である。和歌俳諧の踏込めぬ領地を全部川柳が拓いてゆけばよい。それを川柳であるのないのと自ら狭くする必要は更にないのである。自覚して新しい道に進む者も認めてやれば、江戸趣味を研究してその道に止まっている者も認めてやるがよい。所詮は皆川柳のために力を尽しているのである。邪道だからと言って新しい道を塞いで了へば、残る水の中にはきっとぼうふらがわくに違いない」

筆名は日車だが、あきらかにこの主張は路郎そのもののそれと考えてもよさそうだ。

この「後の葉柳」の同人は木村半文銭、川上日車、麻生路郎の三人である。エリート意識を満喫した形の文芸誌「雪」からみれば、はたまた故六厘坊をめぐって活気横溢の「土団子」に較べれば、寂寥そのものの同行三人との感慨は深い。わずか三枚のこの二つ折の桝形の柳誌から、その三人の作品を抜き書してみよう。

—**人に使はるゝ身のともすれば腹立ち** 日車
—**水に逆らふとはせぬ船の親子ぞ** 〃
—**蔵の戸前はかたく鎖されて三味の音色** 〃
—**親となる其日／＼の手の脂** 半文銭
—**貧しさの素直に生れ来りし子** 〃
—**貧しければ此人間のもつ力** 〃
—**天井の低くさも知らず子はうまれ** 路郎
—**踏ン込めば卵が風に吹かれてる** 〃
—**正直がなにのたしにもならず死に** 〃

三人三様、川柳を闘いとる気のその同人の三つの貌の貧しさが、こうした句の背後から次々と浮かび上る。彼等はそろって貧しかったようである。特に、ことあれば柳誌、柳誌、印刷屋としがない古本屋渡世の身でありながら、ちと並はずれた道楽でのたうち回る主人を抱えた、その一家の暮し向きとは…。それを「後の葉柳」三部の当主路郎自身の句に眺めてみよう。

—**一つ蚊帳にさかなのようにならぶ夜ぞ**
—**思ふまいとすれど月給はたりず**
—**酒のめぬこのかなしみを捨てにゆき**
—**食うだけもないのに今日の手がよごれ**
—**溜息となって出てくるものがあり**

「娘（二女）の死、米騒動、百度に近い暑さが頭の中に渦巻く日々。時計が一時をうつ世間はシンとしている。みると長女が掛布団をタライ回しにしている。長男は枕外に乗り出している。これも親の務めかと三度目の布団をかけにいく。寝顔はあらゆるこの世の罪を父に委托したという軽さが現れている。こんな夜、こんな時、吾々は川柳や俳句どころではないという頭上の圧迫を厳しく感じる」

（土団子第四号編集後記）

誹風柳多留廿五篇研究

—（七丁）—

室山三柳・紀内恒久・入江勇
青木迷朗・清博美・西原亮
八木敬一・鈴木黄・岡田甫

青木迷朗

109 **惜い事袖とひたいに刄物也**

室山—浅野内匠頭長矩の刄傷であろう。「刄物」を受けたのはむろん吉良上野介義央。松島栄一氏の『忠臣蔵』（岩波新書）によれば、「浅野が腰の小刀を抜いて、吉良の顔面（額）に切りつけ、逃げるうしろから、右肩から下へ切りつけた」とある。「袖」はこの「右肩から下」であろう。

浅からぬ恨みひたひへきずをつけ　一六・2

入江—内匠頭刄傷説には、にわかに賛同しがたい。松の廊下にもち出される「衣服」の類は吉良の烏帽子、内匠頭の長袴であると記憶する。

大けんくわ烏帽子をきたが相手也　傍三・34

長はかまでの太刀折ハふはたらき　安八・七4

「袖」が鮮明にこの場面にあらわれることは寡聞にして知らず。この「袖」は、振袖のことで元服以前の女（男）が用いた。元禄頃はすでに「二尺五寸袖の当世じたて」（『一代女』巻一）とある如く、長くなるばかりであった。女が成人すると、この袖を留める。袖留と称して長さを縮めたわけだ。この際、眉もそり落す。共に刄物を用いる。

袖留てこそくる穴か二ツへり　宝一一・信3

（脇の下も縫う）

こうなると成熟——結婚・出産と女がスクラップになるのもはやい。

「青い果実」を好むのは、江戸も現代もご同様らしい。

清—入江氏説に賛。女子の成人となった時、あるいは元服の時に行なう。

八木—この句、岩波新書により礎稿のように解していました。

紀内—小生もぼく然と「忠臣蔵」と考えていましたが、反対意見が出ると、成程「これ」といった確証は出せません。

西原—忠臣蔵ならば「浅」とか、それを暗示する語があるし、袖が何を意味するか、はっきりしない。

岡田—入江氏談が正解。但し女子の元服に袖留はするが同時に眉毛は剃らぬ。眉毛を剃るのは婚礼のあと。

110 **けづりかけ程ハ残して立帰り**

室山—けづりかけ（削掛）は、『広辞苑』によると、柳・桧などの枝を細く削り、茅花のように作ったもの。正月十五日に門戸に吊して、邪気を払い、また、福を招くまじないとした、とある。

主題句は「一国成敗」後の図であろうか。吉原で、客が馴染の遊女に渡りをつけずに、他の遊女に手を出したばあい、その男の髷を散切にする私刑である。この散切を削掛にみたてた句。

ざんぎりにしなとどろ〳〵上さうり

よくつらをふみなんしたとふつり切　拾七・17

一九・8

入江—贊。散切りは非人を一般人と区別するため、大岡越前守が考案したものという（三田村鳶魚）。従って大変むごい報復処置であったわけだ。「けづりかけ程は残して」にはまた抱腹絶倒させられるが、江戸の遊女の徹底できぬ人間味が漂っており、佳句といえよう。残忍非道な赤軍派の女闘士に読ませたいものだ。

鳥籠の中に髪切虫が居る　二六・12

清—なる程とも思うが、そうでないとも思える。「残して立帰り」に被害者としての語感が感じられない。

紀内—何を「けづりかけ」に見立てたか不明である。

青木—礎稿贊。散切り頭を削掛けに見たてたのであり、川柳には客観句が多いので、下五「立帰り」も不自然ではないと思われる。「程ハ残して」と同情的な仕立方で、残忍な私刑行為をカムフラァジしたのであろう。

岡田—本篇、難句の一。僕も「残して立帰り」の語感からして、吉原のリンチ（私刑）の髪切りとは思えぬ。「削掛け」を正月十四日に掛ける風習は古くからあり、各家で作った。それを売りにくるようになったのは、この句集の出た寛政ちょっと前から。しかし簡単に自家で出来る品だから、売りにくる行商人が、自家用に残して帰ることも不自然。従って諸家の説は納得できかねます。自説は、三河万才ではないかということ。削掛がまだ掛けられている頃に、三河への帰路につくと解している。

111　**羽ものか毛ものかおぼつかなくとよみ**

室山—喚子鳥の句。

をちこちのたづきも知らぬ山中に
おぼつかなくも呼子鳥かな
（『古今集』巻一・春上）

『徒然草』（第二一〇段）には、「『喚子鳥は春のものなり』とばかりいひて、如何なる鳥とも定かに記せる物なし。ある真言書の中に喚子鳥なく時、招魂の法をば行ふ次第あり」などとある。

主題句は『古今集』の歌をふまえて、「羽ものか毛ものか」としたのであるが、「毛もの」は喚子鳥は猿という説があったからである。「おぼつかなし」は、この場合、はっきりしない、の意。

むつかしい鳥でおぼつかなくとよみ　二二・4

入江—贊。

けだものか鳥かおぼつかなしで詠み　三五・27

青木—贊。

知らざるを知ら猿とせよ呼子鳥　五三・1

岡田—同。

112　**琴箱よりハ椀箱が御意に入り**

室山—「御意」を殿様のと解すると、「琴箱」は奥様となり、「椀箱」はお妾となろうが、琴に対する三味線としては、「椀箱」がわからない。食べるのが能で、芸なしでも美しいからというのか。

入江—「椀箱」がはっきりしない。

八木—同。椀箱で台所の女性を暗示するか。食事の仕度をするような比較的下級の女性がお目にとまって、それが御意に入ったというようなことではなかろうか。

岡田—当時の「椀箱」の形が不明なので、この一語の解明によって句解は決定する。恐らく三味線箱のように、細長かったのではないか。絵から発見するより、解決の方法なし。これも宿題。

113　**待宵の昼まで只の侍従也**

室山—待宵の小侍従については既出。『新古今集』『平家物語』等の、

待つ宵にふけ行く鐘の声きけば
あかぬ別れの鳥はものかは

の歌によった句。

「宵」に詠んだのだから、この歌のためについに有名なニックネームの「待つ宵の小侍従」も、昼の間までは「只の侍従」であったのだ、というわけ。

入江—贊。

綺麗なあだ名はまつよひとものかは　二二・34

青木—贊。

待つ宵に詠み叶ったで株に成り　天四・天1

岡田—同。

・同人吟・

秀句鑑賞

——前月号から——

浜田久米雄

がたがたになって精出す一万歩

傍島静馬

年寄りは足から言うことをきかなくなるとのことで若い時分から歩け歩けで足を鍛えておればよいものを、がたが来てから始めたのではもうおそい。とは言うものの歩かぬより歩いた方がよいには相違ない。一年でも長生きをするために。

陶然となればこの世も捨て難し

工藤甲吉

なにやかややかやこしい世の中で全くいやになる時も随分あるが適量の美酒に陶然となれば世の中がピンク色に見えてくるからありがたい。やはりこの世に生きているお陰である。

風邪かと言えば咳で答える

吉田水車

咳で答えるに川柳の軽味をおぼえる。はい風邪を引いておりますと返事をするよりも咳をしただけで相手には納得がゆくのである。

スリッパを跳ばし朗報やって来る

八木千代

スリッパを跳ばしがおもしろい。スリッパを跳ばすほど急いでやって来るのが朗報であるからなおさら愉快である。これが逆に凶報であっては困るのだが。

マイペース春のペタルは焦らない

野坂つき子

悠々とペタルを踏む春の道に春の心がつきまとっている。ペタルを踏む人もこれを見ている人もみんなが春を謳歌している。のどかな春のひと齣である。

会釈しておく此の人は高利貸し

大矢十郎

高利貸しの顔にはにくたらしい面もないではないがやはり金を持っている人並すぐれた人間ではある。そしていつかお世話になるならないは別として一応会釈して通るのが社会の庶民の常識であろう。

花時計職をなくした愚痴も聞き

嘉数千代香

失業をして暇ができ花時計の辺をうろうろしながらなにかぶつぶつぶやいている。花時計に心あらばこの愚痴を聞いているに相違ない。けれども花時計の美しさと失業者の不満とは対照的でままならぬ人の世の淋しさがあわれである。

喜怒哀楽の怒りと云う字を消しました

小出智子

怒ることはやめにする——これは大変なことだと思う。怒るとなると怒る自分も怒られる相手もそれぞれかなりの抵抗を感じるからである。怒るのをやめてよろこび、かなしみ、たのしむだけが出来るならばいとも平和な人生となるであろうが、これが出来るためには相当の修養が必要でありむずかしいことである。

二度返事したのが少しかんにふれ

横山一声

人間同士の言葉のやりとりはむずかしいものだが一度でよい返事を二度したのが相手のかんにふれるのだから困ったものだ。そこに相手は何らかの抵抗を感じているように受取ったのかも知れない。

ノックして入ってくれと子に云われ

森田カズエ

子供が一人一部屋を要求している世の中になっている。子供の部屋はその子の城である以上親であってもノックすべきであろう。

ちらちらと妊婦の腹を刺す視線

岩井本蔭棒

刺すはすこしきついようであるが妊婦を取り巻く人の目が多大の関心をもって日々眺められる。妊婦もこれをよく承知しているのだ。

・水煙抄・

秀句鑑賞

——前月号から——

三井酔夢

〝自分はどこまでも自分らしい句を作って行くのが作句精進の本来の姿であると考えています。楽しんで他人の句を読み、苦しんで自分の句を作って下さい〟と言われた葭乃先生を思い出しながら、この稿、共感句と軽いおしゃべりすることに致します。

母の日の花は外国生れなり

田口虹汀

一九〇六年、アメリカのウエブスター町のキリスト教徒アンナ・ジャービス嬢が、母の命日に母の愛情を意味する白いカーネーションを教会の信者に配ったのがはじまりで、このアンナ嬢の提唱をウイルソン大統領が支持、一九一四年に母の日がきめられたとか。

カーネーションを外国生れと軽く表現しておられるが、クリスマスといい、母の日といい、売らんかなの商魂に踊らされている愚かさ、形式よりもっと大切なものを忘れてはいませんかと……するどい作者の眼をおもう。

人生の誤算長男婿に行き

伊藤静枝

核家族の時代、今後そう珍らしいことではないだろうが、古い頭の親達の夢、未ださめやらず、手塩にかけた跡取り息子をむざむざと略奪された虚しさは人ごとではない。

人生の誤算となげきながら、長男の幸せを祈らずにはおられない暖かさに打たれる。

文鳥が寂しがりやの手になつき

梅本登美也

犬、猫、小鳥等、生きものを飼うことは並大抵のことではない。まして文鳥は小さな命である。家人にくどくどとその世話を頼んで一日家をあけたとしても、自分の食事どきに餌に思いをはせる程の情けがなければ、飼う資格が無い。寂しがりやは人か鳥か……。やさしい作者に好感を持つ。

平凡な日常生活が単調でつまらないと言う人は、感じる心を失っている。より深く、より広く、愛情をもってものを見る豊かな心こそ生活の中の詩だと或る詩人がいいました。

花嫁を待たせて瀬戸の霧晴れず

真山国彦

同じ瀬戸内に住む者として共感がある。瀬戸、花嫁と並べると流行歌を連想される弱味がありますが、本当に霧はいたずらものですよね。急用の時、突然の濃霧で交通機関が全部ストップされた時の無念さ、何度も経験しています。霧が待たせた花嫁さん、それから先は読者のドラマ展開御自由に……。

ああ平和草の匂いのする夫婦

小谷葉子

林立する高層ビルの重圧、交通地獄、光化学スモッグ、メカニズムの孤独、冷酷……etc……。ビルの屋上に造られた日本庭園でさえ、都会の憂うつを拭ってはくれない。いつも郷愁のような草の匂い……。

ああと作者が叫びます。草の匂いのする夫婦像を見たのです。いたわり合い、素朴で愛し合う、安らぎを持つ夫婦を。作者の憧憬が草の匂いの惜辞をみつけたのです。

も一人の僕が赤旗振っている

江口度

この句、赤旗が白旗にも動くけれど、自己分析の冷やかな眼を持っている。例えば、どこまで上るか止ることのない物価高に、政治不信にもなると言うこの頃、理路整然とした言い分に共鳴して、振りたい旗もあるのだが、それが出来ない人間の弱さ、人それぞれの立場に生きている難しさなのだろう。とかくこの世はタテマエとホンネの矛盾に満ちている。昔、労働組合、今、管理職にある知人の複雑な胸中を聞いたこともある。

饒舌が過ぎて紙面残り少なくなりました。最後に

夫の死

好きだった酒で唇拭いてやり

鹿の子

何と申し上げたらいいのでしょう。初めての鑑賞に、悲しい句を拝見しました。私もまた好きなものだから余計にじんと来て……。せめて合掌させて頂きペンを擱きます。

五湖抄

菊沢小松園選

浮浪者の夢はベンチに冷えている　岡山市　船越洋之

墓に来てあなたの孫は頼母しい

美しく老いて妥協のなかにいる

対岸へ辿り着くまで身を任せ

美術館ひとり遅れて叱られる　大和高田市　岸本豊平次

華かな牡丹も褪せた色で散り

裾ひけば何とか富士にしてしまい

七十五日過ぎても心にまだ残り

不運な鏡おかめに買ってゆかれ　尼崎市　中谷利美

倒産の蔭に社長の行状記

あばずれにどこか女がまだ残り

前歯一本こうも人相変るもの

好きなようしろとは言っても親心　大阪市　堀口欣一

仁鶴今日羽織をつけて四十分

清掃夫隻腕生きる逞ましさ

世相またええじゃないかが流行りそう

ヒョロヒョロと伸びてマンモス団地の樹　八戸市　安田紘

嫁ぐ日へ父のリズムが狂い出し

単身赴任せめて子の根よ強く張れ

国訛り　じょんから節で生きかえり

いささかの抵抗逆さに印を押し　唐津市　岩下照沖

嘘一つグサリと抉る林檎の芯

はげしさを抱く日の日記白いまま

子燕に野良へ出る戸を閉めきれず

握飯(にぎり)噛る肘に田植の泥乾き　和歌山市　樫村ふみよ

やぶれ樋ぽつりぽつりと雨のぐち

包装紙からおどってる阿波みやげ

なんじゅうに鐘のうらみも道成寺

俳人のうとうた月を見るばかり

噴水を抱いてる虹が羨し　豊中市　安藤寿美子

ねころべば女房がまたぐ2DK

枕には高すぎる程の妻の膝

痛いほどわかると口では言うてくれ　島根県　松本文子

親が子へ結んだ筈の糸がない

遠吠えが記憶の底にこだまする

枯れ落ちてもバラの花弁は香を放つ

欲望もいつしか化石となって生き　大阪市　新川貞祐

復元の妻籠の宿に出るジンズ

階段の傾斜足が覚えて3DK

呆けたのが長寿の秘訣縷縷と述べ　尼崎市　大垣たもつ

自販機へ看板娘いなくなり

死臭さえ気がつきかねる両隣り

天二物与えずガイド声がよい　須賀川市　平栗金太郎

焼香に小さくなってる轢いた人

轢き逃げも見て見ぬふりの石仏

元課長セールスに来る靴の減り　寝屋川市　江口度

鈴虫が孵るとすだれぶらさげる

大胆な猫は車の下で寝る

死んだなら地獄の名所もまわりたい　羽咋市　三宅ろ亭

農協は機械買わせて旅へ連れ

背信を胡瓜は悔いてるように垂れ

洋傘を振る癖あいつまだ若い　寝屋川市　柴田恵美子

分岐点に立ってまばたきせぬ女

ふれ合うた奇縁近松の筆の冴え

味どころ見どころ秋の旅を選り　島根県　堀江蓮露

善行は隅で小さく見落され

折々の花美しと見るゆとり

見通しがよいので事故が多発する　島根県　谷岡芳枝

人並にその人並に歩が合わず

ある時の雲は父の顔母の顔

婦人年まずお手並をヒマラヤへ　滋賀県　柚木踏草

早苗田に目玉焼のような月

嘘重ねた悪女の心濡れていた

五十夫婦それぞれに持つ落伍感　唐津市　山下勝一

泣かされていた方が持つ宴会費

几帳面と言われて損な役ばかり

長生きも夫婦揃ったうえのこと

美しく咲いて造花と間違われ　今治市　大本バット

虫眼鏡丸い世界を覗かせる

事故現場チョークの跡もいつか消え　豊中市　出口セツ子

白蠟の如き白薔薇寡婦の家

恋す身は帰らぬ舟を待つ港

花芥子を染むるは人の罪か血か　今治市　園部正則

老舗とて時代の波は容赦せず

老人のデート静かなお城跡

蓮池の晴れ間のつゆは虹の露　唐津市　三浦広坊

田植機で季節の情緒投げ飛ばし

田植から穫り入れまでも請負わせ

値上りへ明治の反骨買い控え　唐津市　田中三男

掻き寄せた堆肥の山に蠅たかり

膝頭揃えて小言聞いた日も

金借りるところも無くて共稼ぎ　東大阪市　小林節

父娘ていいなステテコとシュミーズ

子の便りぽとりとおちた酒の券

三女住むここもジェット機とぶコース　大阪市　横地正彰

人の波海の波さえ押しかえし

ふろに入るようなプールで都会の子

揺れる乳気にせず女夏駈ける　大阪市　神夏磯道子

後悔のない足跡だ振り向かず

病床にいい知らせだけ持って来る

茶ダンスの位置へ姑と嫁の意地　吹田市　藤原世史春

浪速っ子の弱音もうあきまへんあきまへん

この蟻のどこに胃があり腸がある

白蓮が泥にそまらぬ顔を見せ　高知市　竹崎寛

名乗りなど出来ぬくらしに身をゆだね

あげあしなどとるまい明日にある希望　唐津市　田口虹汀

喰べるより先ず筆にする車海老

寝転べば急に視界が広くなり　西宮市　山田喜代子

よもすがらいたわり育てた子等は去り

一言のいや味心の針となり　大阪市　内藤ますえ

大正の写真に駅前の人力車

日本に蚊帳あり夏という姿　大阪市　須浦つね

きれい好きせめて吾が家を光らせて

診察中のアクビ何だか頼りない　東大阪市　崎山美子

幸福行の切符に乙女は夢をかけ
利用価値あるから手土産かかせない　尼崎市　駒村岳麓

立飲みに波々と注がれ又来る気
晴れ間見て妻に話そう隠し事　鳥取市　有田鹿の子

ひとおりで寂しゅうないかと子の電話
山いちご食べて故郷を遠く恋い　河内長野市　井上喜酔

面倒見よすぎて財布いつも空ら
退屈でごろごろしてるスト休み　赤穂市　谷口赤童

断絶は烏見つめる人となる
もう叱ってくれる人なき齢となり　熊本市　有働芳仙

新婚の雨が嬉しい迎え傘
崩れゆく地球と科学嚇すだけ　尼崎市　小林文月

郷里の小学校の同窓会に招かれて
六十年前に教えたウソをわび
幹事には大器晩成型がなり　寝屋川市　福富隆子

紫陽花の葉かげ一服かたつむり

紫陽花の次々心を変えて咲く　豊中市　高橋古啓

唇を噛んで従うもとより安易の道ならず
反抗は毛虫の頃の話です　尾鷲市　渡辺伊津志

鉢巻きをすれば大きな声が出る
蜜蜂の博愛主義を知るめしべ　島根県　岩田三和

ネオンから赤ちょうちんに舞いもどり
二枚舌それでもたらぬ票の数　新見市　吉田落猿

秋風へ老の身ながも胸をはり
旅戻りああ雑巾も乾き切り　鳥取県　伊藤静枝

花嫁のママの写真に僕がない
公害をさけて自作のひね胡瓜　新潟県　市川一峯

笑い顔見せて大臣の椅子守り
女ですエベレストまで尻に敷き　松江市　岡崎雪美

ちまき巻く手つきしあわせ巻く手つき
梅雨空の不快指数と子は知らず　今治市　伊藤一郎

梅雨明けを坐骨神経痛が待ち
母に似た方が美人と云う姉妹

鳥取県　福田保子
掃除好きの妻で障子をよく破り
核心をつく友情へうろたえる

宝塚市　吉田とんぼ
うちの子は信じて居たい親心
すみませんただ一言が言えなくて

大阪市　平井露芳
赤電話十円分の愛の価値
不用品まだまだ使えるのも混り

兵庫県　高橋近江
渇水の浅瀬と知らず魚は逃げ
病人になって虫のいのちを大事がり

弘前市　小山内貞男
蕗のあくちょっぴり匂うお湯の宿
愛着の晴着にあったしみ一つ

富田林市　中村優
退院が詰所を焦らす仏滅日
月に雲心の影が重くなり

和歌山市　桑原道夫
投函の音確かめるラブレター
スポーツ紙読み合う親子に壁がない

鳥取市　岸本無人
琵琶湖から掬った鮎を川で追う
金の要る相談貧乏ばかり寄り

大洲市　宮尾みのり
奉仕という名でずかずかと入りこまれ
立場あるから親しさへ距離をもち

堺市　栗本藤持
税務署のハガキ読みもせず捨てもせず
挙式待つ控えの部屋はまだ他人

新宮市　熊野渓水
さりげない言葉も女は見逃さず
パチンコのプロとも云えず無職です

伊丹市　樫谷漫柳
〝女だてら〟も此所まで来たかエベレスト
電話ではこれ程きつく言えるのに

姫路市　大原葉香
新緑の山はだ割ってホテル建ち
ゴメンとも言わずに自動ドアが開き

竹原市　鈴木かつ子
蹴る石もなく唯ひとりかみしめる
飛んでいる蝶にも花の好き嫌らい

広島県　原田篤史
考えがまとまりそうな星の町
夕焼小焼雀も帰る宿があり

岸和田市　池田露子
特売に合わせて今日のお献立て
母夜なべ明日ははたちの晴着縫う

岸和田市　池田香珠夫
年金で食べる一と間の老いの城

落書の傘にいつでもいる女　名古屋市　大林曲ん手

いい事を聞いて口下手それが出ず
差し延べる両手の欲へ飴一つ　橿原市　西本保夫

あきらめてタイムカードを打つ悟り
こうなればただ平社員で押し通す　唐津市　岩崎実

早よ起きて又遊ぼうと子は別れ　大阪市　花田繁子

平和主義どっちむいても阿呆になり　大阪市　村島秀村

まてばこそ見事に咲いた花菖蒲　堺市　堀畑日々子

雷をこわがる犬が押入に　和歌山市　吉野久子

母子家庭チャンネル権もゆずり合い　七尾市　松高秀峰

安楽死佐藤首相も過去の人　倉敷市　高山みどり

復元の侍屋敷となるとなり　今治市　真山国彦

同じ顔だが金溜めた顔と逢い　今治市　今井松花

男とは認めて呉れぬ露天風呂　今治市　古野伶人

托児所でパパ一段と哀れなり　新潟県　高野不二

この人になら教えたい新入社　出雲市　藤井晴月

二歩三歩退いて打診の愛量る　島根県　飯塚虎秋

老眼に世間のものは見えにくく　八戸市　島田昭治

平凡に生きる難かしさ身に沁みる　鳥取市　勝山紫宏

握手する軟かい手と冷たい手　松江市　梅本登美也

べからずの立札目立つ遊歩道　泉佐野市　大工静子

仲人として胸のハンカチ取り替える　高槻市　山田スミ子

よく食べる息子牛肉の値は聞かず　高槻市　竹内花代子

月の出を待っては居れぬ鷹が峰　西宮市　朝山千世子

あじさいにロマンの過去が甦えり　諫早市　江副二牛

ミキサーの世話にもなって総入歯　堺市　檀野茂子

守り合い奪い合いして愛という　岡山市　西田溥子

貧しくも心に咲かす四季の花

同人特集

戦争はイヤだ！

鬼畜米英！破竹の皇軍！
聞いたか　消したか　備えたか
一億一丸！一億防衛！
俺もお前も御国の柱

（戦時中の標語です。不二田一三夫）

将校待遇曹長従軍記

大阪市　本多柳志

◇一九三七年（昭和十二年）七月七日芦溝橋一発の銃声は日本の運命を大きく変えた。この日支両軍の衝突に端を発した全面戦争。政府の不拡大方針とは逆に、軍は次々と戦線を拡げ南京、武漢を占領し軍馬は怒濤のように南進した。支那の民衆は抗日民族統一戦線を結成して頑強に戦い、翌年には戦線膠着状態となって長期化した。日本はこの戦争が元で後には太平洋戦争に突入して、遂に破滅への道を歩むことになったのだ。

そして其の年の九月には香椎中将の率いる北支派遣軍の先鋒は京漢線の要地新楽を落して先兵は既に石河荘に迫っていた。ここの陥落も間近いと噂されていた。その頃私達満鉄各部課から選抜された技術陣三十五名は、北支派遣軍工作班の結成を見て、九月十日には異状なまでの緊張感を以て、山海関に集結していた。そこには既に北支担当の杉理事も先着していて、これからの任務遂行のための訓示を受けた。

三十年もの昔のことなので其の全部は覚えてはいないが大体「諸君も知っての通りわが満鉄は国策遂行唯一の在外機関である。この度不幸にも日支間に戦争が起り、其の戦域は北支全域に及んでいる。占領軍の背後には膨大な我が国の権益と財産がある。或は破壊され或は焼かれている。又数十万の無この人民が戦災に苦しんでいる。この権益財産の保全活用と人民の宣撫とが、今や戦後の大きな問題として提起されている。人民の宣撫についてはわが社の、八木沼宣撫班の結成を見て既に各地で活動を開始している。君達工作班の任務はこれら権益と財産の現状を詳細に調査し、戦後の我が国の支那対策への資料の収集にある。苦しいが働き甲斐のある仕事である。明日からは軍の指揮下にあって、任務遂行に遺憾なきを期せられたい。健斗を祈る」とまあこんな話であったと覚えている。

◇北京の香椎軍司令部で工作班の新たな編成がなされた。全員を五つの班に分けられてそれぞれが南京、太原その他の各地へ進駐することになった。私達の第三班は私以下四名の技術員に上海の同文書院在学中の島田通訳を加えて五人。石河荘駐在と決った。司令部での係将校の訓示も大体杉理事のと大差はなかったが、前線の兵隊は激戦のあとだけに気が立っているから、非戦闘員の君達はこの点充分注意して仕事をして貰いたい。身分証明書に依ると君達の軍人としての階級も、或は曹長も居り上等兵も居り色々であるが、この任務に在る間は下士官は少尉の、以下の者は凡て下士官の待遇をする。と云うのであった。この事は一体どんな処遇をしてくれるのか当時は解せなかったが、昭和十五年に発表された満鉄社員の論功考証で、曹長では貰える筈のない私が勲六等になっていたので、少尉待遇とはこのことだったのかと知った訳であった。

石河荘陥落があって数日後の九月の中旬頃に、石河荘行きの軍用列車に便乗して北京を出発した。列車といっても兵隊を満載した無蓋貨車数輌編成である。九月末の北支の夜は

寒かった。折柄の満月の光は緊張した兵士の顔に青白く光っていた。

◇戦いがあった後にしては思った程も石河荘の市街は荒らされていなかった。近くの山中に逃げていた市民も、ぽつぽつ戻りつつあり市内には露天市場も開かれていて、野菜やくだものも売っていた。街の秋序も追々整いつつあるという状況のようである。谷萩少佐の石河荘守備隊も駐屯していたので早速顔を出して挨拶に行った。少佐は唯一言「ご苦労ッ」と言っただけであった。この人は太平洋戦争中には大佐にまでなった人だが、そのやり方が余りにも傲慢で専横振りが市民の反感を買って、敗戦後良民殺りくの戦犯として絞首刑になった人だ。吾々は先ず発電所の調査から手をつけた。日立製千キロのタービン発電機二台が何の損傷もなしに健在だった。蒸汽さえあれば立派に発電出来ることが判った。早速市内要所に「元発電所所員は戻って来い。給料も支給する。安心して戻れ」の伝単を張って廻った。二三日すると来るは来るはほんものにせもの取り混ぜて、四五十名程集った。早速簡単な口頭試問をしてほんものの電工と思えるのを十名程雇った。発電所の運転は割合簡単に行って、何カ月振りか知らんが所内に電灯が点いた。問題は市内の配電線であった。この方は相当ひどい損害を受けていたので、更に人を入れて整備をして廻った。兎に角守備隊、野戦病院、郵便局、停車場それに兵隊さんには無くてはならない岡場所（編集部註―人肉女性のいるところ）これだけは何としても夜だけでも電灯を点けてやるつもりで日夜急行で整備した。努力の甲斐もあって旬日ならずして一応所期の目的を達したので、守備隊長からの「戦後の復興と治安の回復に多大の貢献をされた」との感謝状をみやげに、次の目的地の山西省の太原に向った。

◇与えられた活字に制限があるので簡単ながら結論をまとめたい。

神は人間が悪のみを計り行うのを憂え、自らが造った人間を滅す決心をした。四十昼夜の雨ですべての生物が死滅しノアの一族だけが残った時、神は祝福して「生めよ殖えよ地に満てよ」と言い、再び洪水を起さぬことを約束した。これがノアの洪水の神話である。

果して人類は、この地球の上に生めよ、殖えよで華を咲かせただろうか。一八九九年の五月十八日。第一回世界平和会議がヘーグで開かれている。ここで各国は戦争の絶滅を約束した。ところがその年の十月には南アフリカ戦争になり一九〇四年に日露戦争を起し、一九一四年第一次世界大戦、一九三九年第二次世界大戦に至り、なおその後も人間相剋は止まるところを知らない。しかも戦争はその規模を次第に拡大して原爆の出現となり、更に水爆の脅威となった。人間相コクの戦争の無意味で空しいことは、アメリカが四十二兆円の軍費と五十万の人命を失ったベトナム戦争を見ても明かである。神に祝福されたノアの子孫は、自らの知恵におぼれて、神をも恐れざる人類死滅の道具を使用せんとしている。再び洪水は起さないと約された神も、人類自らが洪水に非ざる火災を起すことを何と見給うであろうか。前後約六カ月勝ちいくさの北支の戦線に兵隊さんと起居を共にしたがその結論は、「それでも戦争はイヤだ」

死線を越えて

和歌山市　野村太茂津

スパッと斬られたし大らかに生きたし

この句が生れる心境で今更「戦争はイヤだ⁉」なんて、戦争の体験者にとって、些か惨酷な「題」である。

「思い出すのもイヤな戦争である」とは多くの人々によって話され、書き尽されている。

しかし私にとっては、「敗戦はイヤだ⁉」とは声を大にし、顔をゆがめて叫びたい。だが、戦争が始まる前から終戦まで、私の青春の情熱のすべてを注ぎこんだ期間を指して、「イヤだ⁉」とは言わない。何故なら、私の場合、「悔」は見当らないからである。私のすべてを賭したからである。

今生きてこそ戦争は罪悪だからイヤだと人々は言うのであろう、つまり、「敗戦」があったから「イヤだ⁉」と言えるのではないかと私は私なりに思う。

純粋に命まで捧げていたとは云え、小さい

利己的にイヤだナア、と思った場面に出遇ったことは数知れずあるが、全体として今考えてみると、イヤだった、と云い得ない何かがある。

その「何か」を考え追求してみると、青春のすべてを費したと云う安堵感ではなかろうか、気取って云えば、「心頭を滅却した」からだろうと思うのである。そして種々の多くの尊い体験は、今こそ有難度く生かされている。

この事についてはもっともっと云いたい、聞いてもらいたいことが沢山あるが……紙数に制限もあり、その上に私の拙い表現では、読者にとっては難解なことと思い残念至極である。

二月といえば寒い頃だナアと、考え勝ちだが、暑い暑い昭和十七年ビルマ戦線での話である。

竹とニッパ椰子の兵舎、灯火管制の窓には毛布を張り、テーブルの四隅にローソクを立てて、毎夜越中褌姿でマージャンである。

ある早朝航空軍司令部の緊急命令で飛行基地移動、Mに飛んだ。翌日トラックで荷物を取りに行って驚いた、私達の室は跡型もなく、小爆弾の直撃をくらっていた。牌は弾痕の土穴に散乱し、その他の物も飛び散り消えていた。あの命令が一日遅ければ……四匹の雀友は牌を握ったまま、褌姿で名誉？の戦死を遂げていただろう。

死神が私を避けてお通りになったのである。印度とビルマ国境爆撃で、右腕を機上でやられて、その年の十月転任命令、満州に帰任することになり、ラングーンから輸送船に乗船すべく兵站旅館で待機していた。久し振りに街で飲み過ぎた理研酒で幸か不幸か翌朝出帆の船に寝過ごし次の船に便乗（こんな時は自隊の連絡機で飛ぶのだが、機材不足だった）マラッカ海峡も無事に帰国や転任の集合地シンガポールに着いて驚いた。

前の日に乗船する筈だった船が、敵の潜水艦の雷撃一発を喰って轟沈（着弾と同時に沈没）全員不明だという。

その夜はシンガポールの兵站旅館キャセイホテルに室をとり、久し振りに優雅な都会人気取りで、私服で街に出かけ、ルーレットや射的等で遊び、ブランディーを痛飲、水ぽいオーストラリアのビールで酔を覚まし、生命の洗濯して宿に帰った。

その翌朝のことである。私達の船の次の船が、又々轟沈の報である。つまり轟沈と轟沈の間にはさまれたのである。

人間の運というか、不思議な、エタイの知れないショックを強く覚えたものである。

帰国船団の編成や乗船者の準備のため、シンガポールで約一か月待機していた。（その間の裏話、武勇伝は活字に出来ないので敬遠）いよいよ九隻の編成完了の報に、帰心矢の如く、多くの負傷兵、軍属、看護婦、英軍、濠軍、オランダの捕虜や錫のボーキサイト等を積み込んだ九隻の船団は、シンガポール港を出航した。私の乗った船は一万トン余の欧州航路で活躍していた貨物船で、九隻の船団の真ン中の指揮船、各船が蛇航、船団そのものも蛇行、対潜警戒をしながらの航行である。

サイゴンの川下港サンジャックを経て一路北上、海南島を過ぎ台湾南端、高尾港に寄港一泊、紺屋高尾とシャレて五時間ほど特別上陸、その頃内地では貴重品となっていた氷砂糖をカマス（筵を二ッ折りにして縫い合わせたもの）に一俵と乾燥バナナも買い込み、内地みやげに積みこんだ。その日の朝出帆、船室には病人の歩兵中尉（山口の萩市の男）と馬鹿話をしながら暑いベッドで昼寝したり、ウツツを抜かしていた（そんなとき、帰心矢の如しと云うのであろう）。福建省の沖だった、突然空襲警報⁉と同時に体はモンドリ打って投げ上げられ、上段のベッドの裏に鼻とおデコをしたたか打ち叩きつけられた、天井の電灯（お椀を伏せたような丸い蓋）床上に落ち音高く破れて、目が覚めた、軍服を着て、軍刀はサムライ（ズノウ）差しにピストルは肚に突っ込み、図嚢には氷砂糖を詰めこんで、上甲板に飛び出そうとした時、カラカラパリパリと機銃掃射の弾が船体に当り、P38という双胴の敵機唯一機は勇敢に荒れ廻って中国大陸方面へ飛び去った。船は次第に傾斜を始めたが、なかなか沈まない。船のエンジン音はまだ聞こえていたが、病人や女性を救命艇に移乗させ、我々は救命胴衣を着けて少し宛傾いてゆく甲板に残っていたが、船長の要請で船を離れて海に浮いた。

箱根丸は三時間後に船長と共に沈没したそうである。私達は捕虜の乗った僚船ハワイ丸

に引き揚げられて、中国の海岸に沿って、上海の楊子江河口港である呉淞で食糧補給、よたよたと一カ月もかかって、広島沖の似島に上陸した。そして転任地満州の新京に行き、奉天の飛行場で終戦を迎えるのである。終戦後の体験は又ドラマチックで興味が深いが別の機会にゆずります。もう一度云おう、この時点まで「戦争はイヤだ」と思ったことはない!!そしてまだ生きている。

ジャガイモと初年兵

諫早市　原田明春

先ず私が、軍隊志願した経緯から書こう。時既に支那事変酣の昭和一七年一月志願兵として、関東軍に入隊した。「人の嫌がる軍隊へ志願で出て来る馬鹿もおる」歌の文句じゃないけれど、私もその馬鹿の一人であった。その動機がまた馬鹿げたことに、「恋の破滅」といえば、誠の「馬鹿」じゃなかろうかと思うかも知れない。惚れたが因果、命を掛けた恋であったことは言う迄もなかろう。

生れつき早熟といおうか、学生で芸者遊びを覚え、一年半暇ある毎通ったものである。気付いた時は既に親父の財産（貯金）の大部分を費やしていた。当時の金で三千円也（立派な家が二軒新築分）を、遊興費に使い果していた。芸妓と深い仲となり、抜き差しならぬ結果、結婚を約束、親父に手をつき許しを乞うたが許されるどころか、結果は金の出所まで疑われ、貯金の使用がばれたのである。

長男である私が勘当同様に扱われたことは察しがつこう。そこで考えが向う飯、向うグソの軍隊志願である。序の腹いせに実印を盗用、無断で願書を出したのである。幸か不幸か、合格通知が父の許へ届いた時の驚きは大変なものであった。「江戸の敵は長崎で」私は鬼の首を取ったように痛快であった事は当然である。両親姉弟の説得も聞き入れず、ついに昭和一七年一月一〇日、いとしい彼妓は勿論両親を棄て出征したのである。「**汽車の窓すがって泣いた彼妓の手**」

昭和一七年一月一七日満洲牡丹江鉄道部隊に初年兵として入隊す。満洲（現在の中国）の寒は格別、どうしてこの三界の果に意地を張って来たのかと、後悔せざるを得なかった。男子志を立てて、帝国軍人の本懐として、身を以って国難に殉ずるを旨と心得、鍛えに鍛えられたのである。当時私は一八の春である。「**忠君愛国いとし彼妓も棄てて征き**」。

入隊一週間は二年兵殿からチャホヤされ、初日は赤飯、その後はムギ飯（朝夕）昼は馬もソッポを向くジャガイモとパン、その上ビンタの嵐である。ジャガも腹一ぱい食えた訳ではない。半腐れの皮つき三箇、いかに食糧難とはいえ、鉄道隊の訓練は機関車操作、鉄道布設、鉄橋架設等相手が鉄の激しい訓練の日課である。国の為とはいえジャガ腹で頑張らなくてはならないとは、初年兵の誰もがこのことを想像したものがいただろうか。その上一日の作業を終え、入浴前の使役作業、初年兵が排泄したジャガウンコを（食糧難のため営庭に急造された畠）運ぶ作業である。

北満の冬は九月に入れば氷点下を降る寒さとなる。それが一月と言えば、零下二〇—三〇度が普通、小便もウンコもコチコチに氷結、それを鉄挺で石工が石を割る如く手頃の重さに砕き、肩に担いで畠に運ぶのである。固形ウンコを点々と散在、春（六、七月頃）まで放置しておけば、やがて解けて土に染込み自然菜園の肥となるのである。「**ウンコを担いで君に御奉公**」

大東亜戦も酣となり、軍隊も野菜、ジャガ等は自給自足が進められていた。その野菜は部隊の半主食であり、兵の糧となり命となるのである。生るため、勝つ為と思えば、ウンコを担ぐことにも力が籠り、一生懸命作らざるを得ないのである。幸にして農家育ちの私は、その経験をジャガ作りに生かし、栽培技手等とおだてられ、懸命に作業をしたものである。

一期が終え選抜一等兵となり、衛生兵勤務を命ぜられ、牡丹江第一陸軍病院に教育兵として派遣され、野郎ばかりの隊から、人も羨む看護婦さんと共に教育を受けたのである。さすが病院である為か、ジャガより米が主食であった。この教育を終了、白米飯と別れをおしみ原隊付衛生兵として復帰を命ぜられ、ジャガイモ部隊へ帰ったのである。上等兵殿となっていたせいか、さすがジャガもきれい

なものを三度々々戴いたことは話すまでもあるまい。「**ウンコが肩章にかわり光っとり**」

毎日の軍隊生活をかくの如く過しているうち、ソ聯との戦宣布告、撫順警備に出動、終戦を知らされたのが、二〇年一〇月頃であった。部隊解散、着のみ着のまま一年間戦勝国の満人に仕え農業使役（ジャガ作り）をして故国への帰還を千秋の思いで待った。三度の食事はジャガばかり、このジャガも原地人の主食としては、よほど金持の農家でしか食べられない大切なものであり、クーリー（人夫）の常食は高黍、玉蜀黍（トウモロコシ）等の粉で作ったパンである。

敗戦兵の私の食事にジャガを食べさせるのは上等食であったことを忘れない。死ぬ思いの散々な目に会っての帰国後、農家といえども米少量に「カジメ」や「粟」等を混ぜての食事であったが、軍隊で粗食に鍛えられたお蔭で苦にはならなかった。煙草は草をきざんで喫ったことは誰もが経験したことであろう。ジャガは敗戦内地でも主食として扱われ、大切に取扱れたものである。

この苦しさもどうにか切り抜けて現在に至ったことは、やはり軍隊で厳しい生活を嫌が上にも経験し生きて現在有ることではあろう。しかし戦争の狂気は、私等だけで沢山である。この狂気は次代を担う若者達へは味わせるべからずと身を持って体験した者の叫びでもある。現在物価高とはいえ食糧事情は良く、金さえ払えば食える平和は、かえって、好き嫌いの贅沢さんまいを言う人が多いが、考えさせられることである。「贅沢は敵」を頭に刻み込まれた戦中派にとって、贅沢過ぎる程の世の中になったことを嬉しく、又なげかわしくも思う次第である。食べる事に何の不足もなく、楽しく生きる平和は、苦しい戦いに幾多の先輩が、命を掛けて戦って得たことを忘れてはならない今日この頃である。

命拾い

宝塚市　傍島静馬

八月十五日がやってきた。呪わしい終戦記念日だ。又の名を敗戦記念日ともいう。

この日がくると、広島や長崎の被爆もさることながら、戦中、戦後の食糧不足に、苦しんだことを思い出す。

〝起きぬけに列んでオカラの一にぎり〟

まだ明けきらぬ暗いうちから、宝クジを買うが如く、あたるかどうかもわからぬ配給のオカラに、長蛇の列を作ったことが再々あったが、当時のオカラは主食の代用として、甚だ貴重なものだった。その頃、白米など全然無く、玄米、麦めし、大豆入りのめしが食えれば上の部だった。炒り大豆と水で、胃をごまかしたり、サツマ芋の葉や茎、または、水のようなトコロテンで、餓をまぎらわしたりした。ときには子供用に、カビの生えた乾燥バナナを、まねほど支給されたりしたが、とても食えたものではなかった。斯くして、来る日も来る日も、餓鬼のように食物との戦いだった。

それでも、大人は何んとか我慢もできたが、食べ盛りの子供の腹はだまされず、何んとか少しでも余計に食べさせたい一心で、遠く河内方面の農家まで、サツマ芋など食糧の買出しによく出かけた。はじめの頃は、金さえ払えばそれでよかったのが、農家も追いおいズル賢くなり、そのうち金よりも衣類を要求するようになってきたので、多くもない夫婦の着物や、時には子供服の中から、先方の家族に合いそうなものを選んで持って行った。

現金なもので、それが先方の気に入った場合などは、こっそり、玄米の一升ぐらいを、恩着せがましく出してくれた、夏場なら茄子や胡瓜などを添えてくれたりもした。

こんな努力をしても、発育盛り、食べ盛りの子供の腹を充してやることができず、遂には、恐れていた栄養失調に、次ぎ次ぎ、冒されていくのをどうすることもできなかった。ときどき子供達から、せめて麦めしでも腹いっぱい食べさせてくれとせがまれたりしたが、それさえ叶えてやることができず、泣くにも泣けぬ、辛い思いをさせられたものだ。こんな状態は、わが家ばかりでなく、どこの家庭でも大同小異だった。ある地方で、法に忠実な、前途有為の青年判事が、餓死したのもこの頃だった。おそらく、当時を知らぬ若

い人達には、全く想像もできぬ、嘘のような話に思えることだろう。

これを思えば、銀めしはおろか、金さえ出せば、欲しい物が何んでも手に入り、恵まれた生活をエンジョイできる、現在の人びとは、何んと幸福なことだろう。にも不拘、戦時を知らぬ若い人なら兎も角、当時の苦労を、百も承知の筈の年輩者までが、（自分も含めて）お菜の不平を云ったり、パンの耳を捨てて顧みないなど、いったいどうなっているのか、考えさせられる。

生命の糧の食料さえ自由にならないのに、ましてや、酒類などの嗜好品の配給は、殆んどゼロに等しかったが、かかる窮状の中でも、酒飲みは酒飲みなりに、人知れぬ苦心をして、細ぼそながらも、何んとか飲んでいた。

〝肩書を捨ててどぶろく飲んだ市〟

酒好きの大学教授に、どぶろくを飲みに、ヤミ市へ連れていってもらったり、アル中気味の会社社長と、路地裏の飲み屋で、拝むように、して、金魚酒を飲ませてもらったり、見栄も外聞もあったものではなく、僅かな伝手を求めて、東奔西走、それはそれは、いじましい限りだった。また、自家用として、そのころはやりの、局方アルコールに番茶を混ぜ、サントリーの角瓶に移し替え、さながら、ウイスキーの如く、ちびりちびりやったりなどして、口淋しさを紛したりした。

そのころ、その方面にとても顔が利く飲み友達がいて、何彼と世話をしてくれたので、大いに助かったが、あれは、終戦の年の十二月二十五日ごろだった、その友達から、正月用に、アルコールを一缶買ったから取りに来るよう、わざわざ知らせてくれたので早速、指図通り、一升瓶を三本都合して、頒けてもらって来たが、これだけあれば、当分は大丈夫なので心強く思っていた。ところが、忘れもしない、十二月二十九日、突如、その友達の急死を知らせてきた。寝耳に水とはこのこと、半信半疑で直ぐ馳付けたが、顔を見るなり、奥さんの涙ながらの話によれば、本人は、例のアルコールを、昨夜遅くまで、一人で飲んでいたが、そのまま寝込んだらしく、今朝がた起しにいった時には、既に冷めたくなっていたとのこと、何んとも呆気ない死に方で、家族一同、いまだに信じかねているとのことだった。当時、メチールアルコールによる、失明や、死亡者のことを、たびたび聞いていたので、それとなく注意をしていたが、図らずも、友達が苦心して手に入れたアルコールは、局方ならぬ、正真正銘のメチールアルコールだったのだ。そのメチールを、同じように飲んでいた自分に、「あなたは、何んともありませんか」と、奥さんから問われた時は、恐ろしくて、口も利けず、一時はどうなることかと、全く生きた心地がなかったのを覚えている。

酒の飲みっぷりにも、人それぞれに癖があり、死んだ友達は、男性型のガブ飲みで、徹底的に酔わねば気がすまぬほうだったが、自分は、その反対で、盃の一杯を二口ぐらいに、ちびりちびり、舐めるようにやるほうなので、自然に飲む量が少なかったので、危うく命拾いしたとしか思えない。お悔みもそこそこに、帰宅早々、まだ手を付けたばかりの、三升ほどのメチールを、全部捨ててしまったが、不幸にも、まだ三十代の若さで、あたら昇天した友達が惜しまれてならない。もし戦争がなかったなら、諸物資が、平常通りにあったなら、よもや、こんな悲惨な結果にならなかっただろうに、今更どうにもならぬが、憎いのは戦争である。

そんなこんなで、戦争にまつわる憾みつらみを、書こうと思えば、幾らでもあるが、それもこれも、いまは返らぬ、悲しい悪夢の、一コマとあきらめている。

〝メチールと気付いたときは眼が見えず〟

米と兵隊

西宮市　島居百酒

その日は、珍らしくも朝からジャングルの濛気が淀んで、南洋の強烈な太陽を遮ぎり、ミンダナオ島中部の山岳地帯に在るマテンボス山の一郭を陰鬱におし包んでいた。

去年の秋以来、米軍機の連日の猛爆撃に耐えかねて、それまで駐屯していたデルモンテ高原から、人跡未踏のジャングル地帯へと後

退を余儀なくされていた。既に食糧は欠乏し疲労衰弱した兵達は続々と倒れていく。

今は戦闘よりも食糧を獲得するのが睫眉の問題であった。食糧を求めて転々と移動する小隊の地情偵察要員となった私以下十八名の兵は、更に奥深くジャングルを潜り、幾山を越えて進むうち、幸い土民の住居跡を発見し此処に分屯したが、情勢上本隊を誘導することが出来ぬままもう二カ月になる。

その以前から既に数カ月間、米はおろか塩と醤油もなく、野草類を水煮きして露命を繋いでいた。『戦争は最後には必ず勝つ』を信じきった気力を支えにして……。

今日も動ける者全員が日課の食料探しに出動したが、その中の一人が慌しく引返して、『八月十五日に戦争は終ったそうだ。しかも日本が負けて……』と力なく報告した。

『そんな馬鹿な。誰がそんなことを?』

と訊きただすと、その支那事変以来歴戦の古兵は、偶然他部隊の伝令と奇遇して聞いたので確実らしいと憤然とうなだれた。

(信じられない) 思いもよらぬ情報に驚き動揺する心の隅で、最近急に敵機が姿を見せず、不気味な程の静穏な日が続いていることが不吉な暗示とも思えてくる。

(あるいは本当かも知れない) 疑心と反発の渦が錯綜して頭の中を空転する。

昭和二十年九月十六日。大気は模糊として霧が一面にただよっていた。

二日後、果して『出来るだけ食糧を携行して、速かに復帰せよ』と命令が届いた。半数に近い者が栄養失調やマラリヤの再発等で臥っている状態だ。本隊までの道程を想うと、その間の食料と行軍の困難さが黒い壁として行手に大きく立ちはだかってくる。

敗戦の落胆、今後の悲惨な運命、暗澹として思索する頭の一方で、この上は一日も早く生きて祖国の地を踏みたいと云う執念が、鬱勃として消沈した心を急きたてる。

手立ては土民の所在を突止め物々交換に頼るより他はない。急遽全員の私物衣料類を集め、健康な兵五名を連れ、天祐を念じながらその先頭に立った。尾根を伝い渓を辿り、時には生命を危険にさらされたりして不安と焦燥の二日は空しく過ぎてしまった。

空腹と疲労、果てしない彷徨から絶望感に襲われかけた頃、図らずも槍を構えた三名の土民に遭遇した。彼等は下界の戦況など知る筈もない。我々は友好的にその意図を伝えると、彼等は快く酋長の小屋まで手引きしてくれた。我々は持参の衣料類を示して、米との交換を手話で申入れた。彼等にしてもこれは貴重品である。酋長は快諾してくれ、各自の背負袋一杯(約一斗余)に詰める米を脱穀するまでの二日間を待てと云う。漸く愁眉を開いて、警戒の中にも予想外の僥倖を神に謝しつつ野営することにした。その夜、酋長が別に呉れた米を各々飯盒一杯に炊いてそのまま一気にかき込み、尚その上に、酋長一家が序に別に炊いた分から三合分程を更に貰って、ペロリと平らげてしまった。その餓鬼ぶりを、日本の敗戦とこれまでの飢えを知る由もない彼等は、河馬の如き兵隊の胃袋が強者の象徴とでも映ったのか、仰天の目を見張ったものである。まさかと思っていた一升飯食いを紛れもなく自分も共に実践したことが、呆れを越えて神秘にさえ思えたことである。

持ち帰った米は、本隊に合流して飢餓のどん底にある隊に全部放出した。僅か一握の配給ではあるが、痩せ衰えた戦友達が歓喜して迎えてくれたことは云うまでもない。

中学の同期でその頃既に栄養失調で倒れ気息奄々の戦友Aに、『最後の土壇場まで一合の米は残しておけ』と云う戦陣の窘みを忠実に守って、その時まで靴下に入れて秘蔵していた古い米を、配給分の外に密かに与えたら『全身の血が清まったようだ。生涯この恩は忘れない』と蚊の泣くような声をつまらせたのが今もまだ耳底に残っている。

翌日、団体行動のとれない状況下にあったので、三、四名ずつ一組となって筏を作りチグワ川の急流を下ることになった。私達は二日後漸く指定の集結地に辿り着けたが、途中激流に呑まれたり、或は力尽きて敢なく死んだ戦友が大勢いることを後日聞かされたが、集結地に到着と同時にバラバラに収容されたので、その詳細は未だに判らない。

Aも仲間に援けられて一旦は集結地に辿り着いたが、川辺の木立に凭れると同時に燃え尽きた臘燭の火が消えるように息絶えたと聞いて、今も想い出しては心が疼くのである。

その遺族とはまだ逢ったことがない。

三十年絶えた戦友の訃聞く寒さ　百酒

亜鈍の譫語（うわごと）

―今西章雅氏を偲んで

藤村青一

昭和三十年代の私は尾羽打枯して、針中野の屋根裏にも等しい安アパートの一隅で、蟄居していたころだ。訪れる人もなく、訪ねる宛などない文字通りの零落の身を喞っているとき、郵便小包が届いた。通信など絶えて久しい私に、亜鈍宛の小包は全く珍しい。まさか時限爆弾でもあるまいとは大袈裟に想いはしなかったが、包を開いて驚いたことには、二百枚にも及ぶ原稿で私に批評をしてくれという丁重な添書を寄せた今西章雅の名であった。

原稿は自叙伝かと思われる彼半生の記録を川柳の形式で書かれ、一句立のたてまえからすると二千句は下らなかったようにおもう。もちろん暇にまかせて一気呵成に詠みあげ、簡単な感想文を送ったが、どういう内容であったか今では記憶がなく、又思い出せないのが残念である。そのことがあって章雅とはぐっと親しくなったとしても、時折の句会などで会釈をする程度であったが、自叙伝の原稿以来有無通じあう特殊な信頼感が互に醸されていたようにおもう。

昭和三十六年の二月、拙著「詩川柳考」を刊行のさい、大いに力になってくれた一人であり、且亦、「詩川柳考」を理解して、舌たらずのきらいがないでもない拙著の誤解を弁明するほど、善意の人としか私の目にうつらなかった。それは当時拙著の出版記念会のことから端を発した発行所と、刊行委員会とのいざこざがあって恩師路郎氏の憤激をかい、一時は亜鈍孤立の憂目にあったころ、その錦の御旗に立たず反逆者の立場におかれた亜鈍に味方した章雅氏の気骨とか、弱い者を助けようとする古武士的態度は、私の血液型と同じではなかったかとさえ感じるのである。

尾道から帰阪して早くも四年目を迎えながら、いの一番に訪ねておかなかったまま彼の急逝は、何としても私は辛い。彼の方から今春にも来る来ると言ってきていたのに。偶然とはいえ同年輩であり、肝腎の川柳にいたっては私と同様に下手くその定評であるとはどうしたことだろう。川柳関係以外に交わらなかった彼から最初の二千句に及ぶ自叙伝からもその後、全国的にバラ撒いていた夥しい作品や、エッセイにも目にうつらなかった訳でもないのに一句の印象さえ残らないのが残念である。それは私の不勉強さも手伝っているのだが、彼はいつもの人の好い笑顔で、ぼくも亜鈍さんの句は識りません。そんな川柳や作品の上手下手を論じるよりも、「詩川柳考」の主旨とその態度をまもるところに意義がありましょうと、地下で私を庇ってくれていそうにおもう。果してそうだろうか。合掌

板尾岳人金剛山登頂
三百回達成記念句会

日時 八月十日（日）午前十一時半締切・
開会
場所 金剛山頂　香楠荘
兼題 「化粧」　島居百酒選
会費 千円（立食パーティ費込み）
集合 当日近鉄富田林駅前9時半

「登る」　野村太茂津選
「木」　阿部柳太選
「ジンクス」　金井文秋選
「男まえ」　八木摩天郎選
「新らた」　菊沢小松園選
「石」　川村好郎選
「晴」　西尾梨選

愛染帖

橘高薫風選

墨刑とおもうほくろとわが恋よ　香川県　三井　酔夢

反骨の一匹みたし蟻の列　岡山市　行本みなみ

箴言を暗誦してる人殺し
ふりむいた首がおちてる花の下　青森市　工藤　甲吉

太郎地蔵花子地蔵も春を着る
われに妻なく鴛鴦を見ていたり　和歌山市　小川佐知子

寝転べば宇宙は広し何の悔
掛けがねを外してみても来ぬあなた　八尾市　高橋　夕花

水の中くぐりぬけたる尼僧の眸
こぼれない涙が胸に満ちてくる　倉敷市　水粉　千翁

裏返すまじてのひらをじっと見る
種を蒔き終えてあしたへ雲を追い　八尾市　香川　酔々

ひらかなの日記ウーマンリブなのか
ふるさとは柔らかきもの石畳　東京都　山根　白星

駈け出せば風の掟の風車
はたと風止んで心得違いする　岡山県　白岩　文衛

世の父に脱いでならない靴がある
死ぬときを思う生きる時を思う　名古屋市　吉田　水車

スト馴れというも悲しや菜種梅雨
同じ紙でも札という音　和歌山市　野村太茂津

人間に戻る詩人に風光る
青春は眩しい俺をさかのぼり　神戸市　小浜　牧人

含み笑いはモナリザの悲しみかも知れぬ
転々として履歴に残るものがない　倉敷市　高山みどり

祝電はジューンブラインド姪が嫁く
カトレアを抱けば大阪梅雨も晴れ　八尾市　大路　美幸

札束の隙からギロギロ天邪鬼
今日生きた首筋洗うしまい風呂　八尾市　宮西　弥生

たくわえた倖せ他人がつつきに来る
女の動悸こだまする防波堤　今治市　真山　国彦

美容院ヒモは車で待って居る
霊感のように一目で好きになり　竹原市　三宅　不朽

花火師の眼に砂山のあたたかし
花火師の自画像埋めて去る砂丘　島根県　小砂　白汀

オーロラに簀巻きにされて死にたしと　大阪市　新川　貞祐

国鉄のエックの旅でストに逢う　島根県　堀江　芳子

独りでいると不安なのは恋かな　大阪市　宮尾あいき

心夜叉顔に菩薩の眉を描く　守口市　羽原　静歩

人間に還る白旗高く揚げ　和歌山市　桑原　道夫

ピエロもう衣裳脱いでも目が哀し　倉吉市　奥谷　弘朗

儲け主義土地の恵みを忘れかけ　鳥取市　河村　日満

春闘に国民の名はもう貸すな　今治市　大本バット

海荒れて鳥低く舞う港町　岡山県　嘉数千代香

母の祈りが追いかけてくる曲り角　大阪市　金井　文秋

券売機へ戸惑いもせず白い杖　今治市　今井　松花

むっくりと起きてテレビの前へ来る　島根県　堀江　正朗

食べられぬ妻が作った皿の数　堺市　河股　緑水

大団地墓域の如し月の下　堺市　高橋千万子

お互の過去丸うとけ一つ屋根　大阪市　西出　一栄

履物のちっとも禿びぬ淋しさよ　今治市　月原　宵明

掌を砂がこぼるる日の離別　呉市　槇田　英詩

イヤリング愛のささやき聞きあきる　松江市　柳楽　鶴丸

ファッション前線新宿銀座六本木　柏原市　小谷　葉子

演出過剰滅びの曲が聞えぬか　岡山県　出原　敬一

雨後の庭の風情は苔に尽き　今治市　伊藤　一郎

保育園ママは有害添加物　伊丹市　小川静観堂

捨てられて生きてるだけの女です　大阪市　正木　水客

聞き役にまわるズリズリのパンタロン　小松市　馬場　魚山

もとめるに早いが捨てるのも早い　三重県　川上　大輪

隙だらけの背中で父はお人好し　和歌山市　若宮　武雄

泣き笑いつきて人形らしくいる　守口市　野呂　右近

目立たない席を好んで飲んで去り　西宮市　藤村　メ女

嵐来る竜の早さで走る雲　和歌山市　沢山　福水

闇に利く目が地獄絵を見てしまい　尾鷲市　渡辺伊津志

院号を競いし墓の花枯れる　東大阪市　竹中　肖二

蠅を出す窓を開ければ蚊がはいり　東大阪市　竹中　綾女

物言わぬ真珠にもある自己主張　富田林市　岩田　美代

ひとり居るこの安らぎが淋しいな　大阪市　江城　修史

巡り来る亡父の忌記憶のさだまらず　岡山県　竹内　翁童

愛情がほしいとナスビ枯れかかり　滋賀県　柚木　踏草

昔日の駅妻と立つ蟬しぐれ　尾崎市　黒川　紫香

窓あけてみても風のない大阪　松江市　岡崎　祥月

石になる心雑音きこえない　高槻市　山田　季贇

終列車の尾灯へ夏が追いかける　池田市　杉田絵巳子

ペンに黴生えもしようぞ無為の日々　松江市　岡崎　雪美

なにもない強さ気楽に生きている　新見市　吉田　落猿

老妻と汲む備前徳利の菖蒲酒　岸和田市　池田　露子

便箋にすみれの香りまだ残り　笠岡市　木山　古庵

内職は閑老妻は風邪の気味　高槻市　竹内花代子

大夫から主人ひとりが茶をもらい　岡山県　池田　古心

手入れせぬ庭木が繁る門構え　今治市　古野　伶人

踏切は箱から出ると直ぐ降ろし　今治市　岡部　正則

余生とは悲しき言葉使うまい

投句先　〒560　豊中市中桜塚3丁目13－15。**橘高薫風宛**－（一人三句）

百人一首と川柳（14）

冨士野鞍馬

三九　参議等（ひとし）

浅茅生（あさじふ）の小野のしの原しのぶれど
　あまりてなどか人のこひしき
（後撰集）

源等は、中納言源希の子で、天慶元年（九三八）参議に任ぜられ、天暦五年（九五一）七十二才でなくなった。歌人として特に知られてはいなかったようである。

等（ととの）に仲人たのむ公家仲間
株木（一四〇9）

という川柳がある。この等はトトノウと読ませている。

四〇　平兼盛

忍ぶれど色に出でにけりわが恋は
　ものやおもふと人の問ふまで
（拾遺集）

この歌は、天徳四年（九六〇）の歌合せに出された作である。

これを川柳は、その文句を借りて、

忍ぶれど色に出にけり盗み酒
千之（一四〇1）

物やおもふと人のとふ虫歯病
巨眼（一四〇3）

と詠んでいる。

兼盛は、光孝天皇の皇子是忠親王の曽孫で篤行王の子である。兼盛王とも呼ばれた。赤染衛門は娘であるという説もある。村上天皇の時、平の姓をたまわり、諸国の国司などに歴任したが、正暦元年（九九〇）になくなった。三十六歌仙に入れられている。

四一　壬生忠見（みぶのただみ）

恋すてふ我が名はまだき立ちにけり
　ひと知れずこそ思ひそめしか
（拾遺集）

この歌は、天徳四年の歌合せに、平兼盛（四〇）の「忍ぶれど」と同時に出されたのである。川柳には、

人知れずこそと手をやる歌かるた
風松（九四11）

という文句取りがある。

壬生忠見は、忠岑（ただみね）（三〇）の子である。醍醐、朱雀、村上の三代に仕え、官位は低くかったが、歌人として知られ、勅撰集にも多くの作がのせられている。三十六歌仙の一人である。

壬生の忠見を、京都壬生寺の大念仏狂言をタダで見るにかけて、

無言芝居の見倒も定家入れ
紀鳥（三二5）

壬生踊九十九人は只見せず
桃和（六八2）

壬生狂言の見倒しも百に入れ
楽志（八八11）

壬生狂言のでんぼうも集に入
三箱（一三一16）

などと戯作されている。「でんぼう」は、見世物、劇場などへ無料で入場する者をいう。

四二　清原元輔

契りきなかたみに袖をしぼりつつ
　すゑの松山浪越さじとは
（後拾遺集）

清原元輔の父は顕忠、祖父は深養父（三六）娘が清少納言（六二）である。

朱雀、村上両帝に仕え、天暦年間（九四七―九五七）宮中の梨壺に和歌所が設けられた際、大中臣能宣（おおなかとみよしのぶ）、源順（したがう）、紀時文（きのときふみ）、坂上望城（もちき）と共に寄人（よりうと）となり（この五人は「梨壺の五

人」と称された）「万葉集」のよみかたを調べる仕事に従い、また「古今集」に漏れた歌や、その後の歌を集めた「後撰集」を編纂した。官位は国司程度であったようである。正暦元年（九九〇）八十三才でなくなった。三十六歌仙の一人で「元輔集」がある。

夕顔の駒も元輔集にのり　里鳥（九一15）

歌の文句をとり、

片身に袖をしぼりつつよくきいた　古鳥（六七10）

歌かるた片身に袖をしぼりつつ　眉長（三七4）

娘の清少納言を、

元輔の娘枕のしたてばへ　麩丸（七四35）

―「枕草紙」

元輔が袋へ歌の種を入れ　コセイ（一〇〇3）

四三　中納言　敦忠

あひみてののちの心にくらぶれば
むかしはものを思はざりけり
（拾遺集）

この歌の文句を借りて川柳は、

あひみては文ほどもない女郎也　錦江（傍二9）

逢ひ見ての後取遣りの昆布鰯　和国（一四〇4）

と、女郎の心情をいい、見合いから結納とめでたいことも詠んでいる。

敦忠は、左大臣藤原時平の子ということになっているが、実は時平の伯父大納言国経の子であるともいわれている。十二才で昇殿を許され、天慶六年（八八二）三十八才、従三位でなくなった。音楽も和歌も上手であったので宮廷で重んぜられ、「枇杷中納言」「本院中納言」とも称せられた。家集もあり、三十六歌仙の一人である。

四四　中納言　朝忠（あさただ）

あふことの絶えてし無くばなかなかに
人をも身をもうらみざらまし
（拾遺集）

川柳は、この歌の文句を取って、

あふことの絶てしなくと下女かこち　雪下（五九33）

逢ふことの絶えて難儀の坊主持ち　片岡（二七24）

あふ事の絶て久しき松ケ岡　庭花（六六22）

女房も絶てしなくは中々に　藤後（四三24）

などと詠んでいる。久しく男に逢わないことをよみ、松ケ岡は鎌倉の縁切寺東慶寺で、そこへ駈け込んだ嫁をいったのである。

朝忠は、三条右大臣藤原定方（二五）の子である。朱雀、村上両帝に仕え、昇進も早く参議を経て中納言となり、康保三年（九六八）五十八才、従三位でなくなった。士御門中納言とも呼ばれていた。家集があり、三十六歌仙の一人である。

四五　謙徳（けんとく）公

あはれともいふべき人はおもほえで
身のいたづらになりぬべきかな

この歌は、「拾遺集」に「物いひ侍りける女の、後につれなく侍りて、更に逢はず侍りければ。一条摂政」と詞書してのせられてある。川柳は、

謙徳公が買って見る冨の札　文和（一四〇4）

馬鹿な奴謙徳公へ富の願　株木（一四〇8）

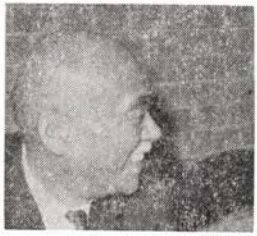
と、富札の当る「見得」になぞらえて詠んでいる。また文句を取って、

巻紙は身のいたづらにやせるなり　広丸（七四14）

がある。

謙徳公とは、藤原伊尹（これまさ）のことである。貞信公（二六）は曾祖父に当り、父は右大臣藤原師輔（もろすけ）で、子が義孝（五〇）である。官位の昇進は早く、村上帝の時に蔵人少将、冷泉帝の時に右大臣、摂政、太政大臣になり、天禄三年（九七二）四十九才、正二位でなくなった。没後正一位を贈られ、謙徳公とおくり名せられた。

川柳塔社同人句集
「川　柳　塔」
頒価　一五〇〇円
送料　一六〇円



福井野迷路先生告別弔辞

中島生々庵

謹んで福井先生のみ霊の前に立って悲しいお別れの言葉を申上げます。長いご病床でしかもご高齢のこととてこうした日がいつか来るのではないかと恐れて居りましたが愈々となりますと胸は迫り、涙にぬれて、追悼の言葉も綴れません。

先生と初めてお目にかかりましたのは、ご令弟長谷川信男先生の告別式の日でした。私が長谷川先生のご霊前に「**お浄土へ一筋道の桜雨**」という句を供えましたところ、なかなかよく出来た立派な句だ。有難うと賞めて下さった事をよく記憶して居ります。不思議なご縁と申しますのか、その後先生は私達と同じ町内にご開業になり間もなく、当時南区医師会員の有志が集って現代川柳の勉強をして居りましたのにご関心を寄せられたのが、川柳によって結ばれる私達との基縁でありました。

当時一般世間の人達は、現代川柳に対する誤った認識を持って居りましたが、先生はこれに反し川柳の本態とするユーモアというものに対する確固たる一見識を持って居られました。その一端とでも申すものが「川柳塔」一昨年12月第559号にご執筆になった短い文章の中にも伺えるのです。即ち「ユーモアはアングロサクソン特有の文化たることは夏目漱石、厨川白村が東大、京大に於て口を酸くして講じ、漱石からは猫や坊ちゃんが生れた。この両文豪の残した、本当のユーモア文化を定着せしめるものは、川柳文学をおいて外にないと確信する」というのがその大意でありました。もともとユーモア文学に造詣の深かった先生が、一度現代川柳の道に手を染め踏み入られると忽ちの裡に、ベテラン先輩の中に伍して、周囲を驚かさせる存在になられたのであります。勿論、それはそうしたご素養があっての事ではありますが、見逃してならぬ事は、実に熱心に毎月の定例句会にご出席になり、作句三昧にふけられたことであります。句会に出席することが、句の上達する上に、第一の必須条件と言われておりますが、句会に出席することなく自宅ばかり如何に勉強しても、上達する速度充実は比較にならぬものであります。その事実を如実にお示しになったのが、先生のお努力ご勉強振りでありました。最近愈々ご高齢になられてからは厳しい冬の寒い夜、酷しい夏の午後の暑さ等、特に蔭ながらお案じ申上げて居りました。毎月定例句会でのお席も、いつの間にか指定席のようになり、私もそのお近くで二時間ばかりを過ごすのが常となって居りました。出来上がった句を句箋に清記し投句する迄の難しいお顔の表情が、愈々披講となると、ご自分の入選句に破顔一笑まことに柔和な童顔に帰られ、あのとろけるようなあの慈眼も今となっては悲しい思い出となって終いました。一つ二つ先生の作句を拾い上げて見ました。

暫らくと懐しい顔の名を忘れ
千枚漬け好きとアメリカ宣教師
すき焼で日本流のクリスマス
世渡りの一つ酔いつぶれた顔

そして東郷元帥の最期を診てと題して

息の引きとりかたまでも偉らかった

という句があります。私はしばしば先生から親しく東郷さんのお話を興味深く拝聴する機会がありました。昭和九年東郷さんがお亡くなりになった当時、先生は海軍々医大佐で、海軍省医務局長と海軍軍医学校の教官を兼ね

て居られ、最後まで東郷さんの身辺に親しく主治医としてのご苦労があったことも幾度かお伺致しました。今日先生のみ霊をお見送りするに際しまして、つくづく先生の慈眼が古武士的厳しさの中にたたえておられた事を私達は永久に忘れる事は出来ないでしょう。

（中略）

川柳塔47年3月号にご執筆下さった「老いは人生の至境」と題して貝原益軒の言葉をひき、そしてこれを現代医学を通じて、一に禁煙、二に咀嚼、三に笑顔でよく眠れ。禁煙はこれを読んだ時から始めること、咀嚼ははよく噛め一口三十回以上かむこと、茶漬厳禁、過去将来の不安心配を棄てて笑顔に帰れ。そしてよく眠れ、酒はどうじゃ？さあそれはお預け。いや適量適量。とあります。—後略。

昭和50年7月8日

川柳塔主幹・南区医師会友人総代

中島蓬太郎

野迷路さんの思い出

山川阿茶

野迷路さんが亡くなられたとお電話があった時、心にグサッとつきささるものがありました。と云うのは春ごろだったと思います。赤十字の方へお電話下さったのですが丁度忙しい最中だったので「おいそぎでなかったら今晩私の方からお電話いたします」と云ったなり忘れてしまってそのままになっていたのです。あれが最後のお電話だったのです「申しわけない事をした」と全身に電気が走ったような思いがいたしました。最近お電話もなく御病気だった事も知らなかったのです。

先生は八十三才、いつまで生きておられてもよい御身分、せめて米寿までおられたらなど繰言が出て来ます。

先生は三高から京大へ進まれ海軍軍医中将で終戦をむかえられ川柳塔社の近くで開業しておられました。御在職中は東郷元帥の主治医もつとめられた方です。海軍の軍人さんらしく万事スケールが大きく堂々たる体格、中将の風格、抱容力はあり、少々の事には動ぜぬタイプの方でした。体験は豊かだし腹は出来ているし学問はあるし、いい句の出来るのは当り前、句を見せて頂く度に学問的基礎のある人の句はちがうなと、いつも感心させられ不消化な句を作っておる自分が恥しかったのです。

野迷路さんには迷路さんと云う弟さんがあってこれも耳鼻科のお医者さん。杏林川柳会の先輩で杏林川柳会へ私を誘って下さったのはこの迷路さんで、迷路さんのお宅での句会で初めて路郎先生に紹介され門下生として頂いた柳縁があります。杏林川柳会は底ぬけに愉快な会で野迷路さんも海軍時代の面白い話をして下さってよく笑わされたものでした。

毎年秋に医師会の敬老会があってこと三四年野迷路さんと食卓を共にしておりましたが昨年は御一緒出来なかったように記憶しております。

野迷路さんはたよりない私を大変高く買って下さって「阿茶先生」と必ず先生をおつけになるのです。そしてよく「この句どれがよろしいか」とか「どれを出しましょうか」など電話して来られ、私の句でお眼にとまった句があればべた賞めに賞めて下さって返って恐縮しておりました。

いつか朝日新聞に後藤比奈夫と云う方が、「余情のプラスとマイナスと」と云う題で偶然にも野迷路さんの句と私の句を例にあげて大変面白いと賞めて下さった事がありまして早速先生にお電話して共に喜んだ事がありました。

赤旗を何故左手で振らないか　野迷路

今は胸が一ぱいで何か支離滅裂な文章を書いたようです。

野迷路さんの句を少し拾ってみましょう。

これ心王者の如く歩ませよ
階段の人生地下鉄ならずとも
さて何の用か二階まで来て忘れ
裏表足して二で割る人生さ
勲章を命にかえて見た重み
万物に法則　人にだけ運勢
一言を押えた仲のよい夫婦
顔の痣見えない側に立つ好意
達観、デリケートな神経、経験の豊かさ、抱容力、皮肉、おとぼけと色とりどり静かに味わって下さい。そして野迷路さんの御冥福をお祈り申上げましょう。

合掌　阿茶

鷹揚に帰らぬ旅へ挙手の礼

渡米の成果

本田恵二朗

六月十一日訪米しましたが、その成果を振り返ってみて、目的を百%完遂出来たと自認しております。三つの目的をさげて参りました。その一は、サンノーゼ市長公式訪問、その二は日米交歓川柳大会の選者を勤めること、その三はライオンズクラブ交歓がそれでした。市長訪問は約束時間に市庁玄関に参りましたが、公式訪問なので日の丸の国旗がアメリカの国旗と並んで掲げられていたのには感謝しました。市長は女性であり、お若く美人でノーブルな方でした。コンニチワと日本語で呼びかけて固く長い握手をして下さって、沢山話しかけて下さいましたが、アメリカ語を知らない私にはその意味はわかりませんが温く心に通うものを感じ取りました。

サンノーゼ市に於ける川柳大会はなかなかの盛会で、会場は笑顔の渦です。私の句をあれやこれや知っていて下さって、それを話題にして下さるのがとても嬉しいことでした。

日本は四人で在米柳人は五十数名で、五本のトロフィーを競い合うことになりましたが私は好運にもトロフィーを頂きました。天位の句に与えられたのです。『友情の表も裏も同じ彩』これがトロフィーを頂いた句です。トロフィー二本を日本に持ち帰えりました。総合点一、二、三位を日本側が取りまして、私はその二位に割り込みました。私にとっては生涯の良き思い出となることでしょう。在米柳友の皆さんの心温るもてなしに日本の血と心が通い合う思いが致しました。

ライオンズ交歓はロスアンゼルスクラブとサンノーゼクラブとで固く温い握手を交しましたが、世界共通のライオンズ精神の温さと尊さを身にしみて感じたことでした。こうして三つの目的を完遂することが出来たことの報告できることを嬉しく思っています。目的を縦糸に観光を横糸に織ったお粗末な織物が一枚出来上りましたが、川柳でそれを染め上げてみたいと考えております。

信州から

金子呑風

高峰柳児さんの句集が出るとのことを聞きました。長野県では珍しい話です。

×

「愛染帖」と〝活字になった処女作〟面白く拝見しました。

×

公害に是所で泳いだ小さいころ
判らせるつもりどもりの汗を知り
自炊客刻み煙草を探しに出

暑中御見舞

八月十七日、十八日の
でかんしょ祭
にどうぞ

川柳塔社
篠山支部
一同

氷

山根白星選

バス停も氷の旗をあげて夏　暁明
氷壁の峻厳人を寄せつけず　軒太楼
流氷は北の国にも春を告げ　正則
流氷に乗ってあざらし所在なし　落猿
流氷を見るさい果てに佇つ二人　露子
かき氷浴衣の胸がひろげられ　登美也
氷切る音も真夏の風物詩　道子
幻想のうつつ氷上バレエショウ　一風
砕氷船助けイデオロギーと別　松花
裏町の恋をぬくめる氷水　国彦
流氷が根室に春を持ってくる　一郎
かち割りを口に難問解けてくる　白水
つららポタポタ春の詩を奏で　七面山
氷屋の旗色あせた雨つづき　思月
氷水一つは溶けて待ち呆け　福水
氷のうに母の祈りも共に詰め　香珠夫
氷だけ残しストロー音を立て　暁風
天然の氷をヘリコプターの贅　秀峰
氷炭相容れて金婚式となり　貞祐
かき氷離婚経緯共に聴き　漫柳
高校のデイトは氷水で足り　木魚
配達を終え氷屋もかき氷　昭治
氷屋の氷が解ける立話し　甦光
コマーシャルオンザロックの音に負け　近江
まだほしい氷へロが承知せず　千翁
氷とけはじめてやるせないさだめ　正彰
氷屋の冬は灯油の缶を提げ　みどり
気がつけばわが胸にあるアイスノン　代仕男
氷屋がバイトを頼む夏祭り　重人
汗かいて働く氷鋸である　静泉
のどもとを過ぎて氷のあたたかし　隆子
お見合の氷はなさけなく解ける　古心
体温計度は氷のうがいると云う　静枝
氷割るその間も恐い息づかい　みのる
氷嚢を吊って病人らしく臥る　カズエ
樹氷キラキラ瞼の裏にある　凡九郎
水に浮く氷の性を笑えるか　〆女
つららゝ溶け春のリズムとなって落ち　〆女
身動きもできないままの氷柱花　梁水
耐えてきた樹氷へ一滴ずつの春　梁水
こじれてる話が氷水になり　綾女
氷柱に立つ宿命へ妥協する　克枝
つまずいた氷全速力で逃げ　踏草
氷挽く背で仁王が伸び縮み　右近
呂律もうオンザロックにあやつられ　洋々
氷柱花触れる疑い深い指　春日
道ならぬ恋の氷雨に濡れるまま　里風
かき氷恋の浴衣のすだれ越し　宵明
八月の家計氷が肩を張り　季賛
氷水ブリキの匙のなつかしし　伶人

軸
氷嚢に天井異様なる木目

夏休み

小西雄々選

分校に虫の声のみ夏休み　豊生
夏休みプランと金が折り合わず　宵明
うかうかと半分すんだ夏休み　暁明
夏休み休めない子へ朝を起き　可住
夏休み校庭ひっそり蝉の声　正則
子の日記はみ出している夏休み　里風
宿題に親が苦しむ夏休み　道子
バイトして使うて終る夏休み　一風
夏休み親の学力子に知られ　松花
夏休み故郷の良さが判りかけ　一郎
夏休み隣も派手に乾す水着　軒太楼
標本を集める苦労の夏休み　季賛

夏休み親に言えない友ができ　思月
夏休み故郷の海で恋ひろう　福水
夏休みさて盲腸を切るときめ　洋々
夏休み兄弟喧嘩へ一苦労　暁風
夏休み出費多難へまたも金　祥月
夏休み一時帰休の気も知らず　本蔭棒
作文は良い子になった夏休み　紘
楽しみにした夏休み風邪を引き　紫宏
夏休み三日目からは邪魔になり　素身郎
先生がうらやましくなる夏休み　保夫
子に短く親には長い夏休み　右近
電話する彼も裸か夏休み　近江
日稼ぎの目にぜいたくな夏休み　代仕男
母さんの小言がふえた夏休み　重人
夏休み西瓜へ内孫外孫と　古心
夏休み孫くる便りふとん干す　カズエ
親子して故郷でくつろぐ夏休み　肖二
夏休みふすま破って孫帰える　綾女
絵日記の過疎はすずしい夏休み　梁水
会社よりわが家の暑さ夏休み　度

佳

夏休み終って風のおちた部屋　落猿
東京に馴れて帰らぬ夏休み　国彦
夏休み田舎の墓を教えとき　一郎
不景気も手伝いながい夏休み　七面山
夏休み故郷で西瓜と母が待ち　どんたく

人

夏休み浴衣着せるともう大人　伶人

地

夏休みにも帰省せぬ子を母案じ　春日

天

二浪する気かと夏休みを叱り　たもつ

軸

三度目の東大めざす夏休み

観光

臼井三林坊選

花火での幕あき観光夏の陣　軒太楼
観光をきびしくチェックする仁王　武雄
観光に自腹は切らぬ議員団　登美也
写真土産トイレ観光バス発車　伶人
奥さんが説明もする観光寺　バット
ありふれた景を観光バスの旅　露子
観光地に住んで旅する暇が無し　七面山
亡命をする気観光団を抜け　洋々
観光地仕入がにぶる空模様　木魚
腕組んで見せに来ている観光地　無人
観光の一晩軌道から外れ　甦光
観光のパンフレットに虹をかけ　千翁
観光のコースに人気歌手の家　重人
観光地で旅情温めるのれん酒　静泉
観光地猿に手を焼く時代来る　隆子
観光のホラも聞いてるコップ酒　古心
入園料またその奥で拝観料　芳仙
観光バスよく寝るなあとほっとかれ　花村
歌で聴く程でなかった観光地　梁水
千年の歴史を変える観光地　道子
観光地穴場を探す宿ゆかた　福水
裏庭でおしめが干く観光地　本蔭棒
観光地大河ドラマが生んで捨て　漫柳
御自慢の地酒で酔わす観光地　右近
あらたかな神さんもある観光地　どんたく
やかましい農協観光団が発ち　踏草
観光地流人の墓地にカンナ燃え　豊生
串鳥賊を咥えて回る景勝地　代仕男
藤村のゆかりの宿の紅椿　カズエ
これよりは木曽路瞼をそっと閉じ　カズエ
黒木御所小雨の中で聞く哀史　〆女
観光の土産が重い萩みかん　代仕男

佳

観光の大義自然を打ち壊し　伶人
靴ベラで観光客が追い出され　里風
観光の裏に素朴な民がいる　白水
拝観料観光客をアゴで読み　梁水
奈良の鹿写真に慣れたポーズする　みのる

人

花菖蒲観光客へ媚びている　肖二

地

観光のルートをそれた鍬を打つ　可住

天

古都観光今日の国賓気が軽し　いわを

北川春巣著
随筆と句集「聴診器」
送料共　千円

初歩教室

題 ―「取」―

本田恵二朗

なんの取柄もなく一生終りそう　ますえ
（取柄ないままで年輪ばかりふえ）
稼いでも稼いでも物価に吸い取られ　同
（物価めに汗の稼ぎを吸い取られ）
とりあえず年だけ取って来た半生　喜代子
（年だけは忘れず取ったわが半生）
山菜を車で町から取りに来る　つね
（山菜取りに来たのやろうと里の母）
仏前に蚊取線香たてる祖母　生仏
（ご仏壇蚊取線香で間に合わせ）
取材記者事件現場へ先陣争い　濁水
（ラストスパート争うように取材記者）
広い庭取っても取っても草が生え　繁子
（雑草に庭を取られて病んでいる）
休暇まで取ったのに阪神が負け　三十四
（お気の毒千万、ファン心理が出せた）
言葉尻取られて議長青くなり　同
（言葉尻取って議長をあわてさせ）
取り替えて欲しいお脳の一部分　満津子
（脳味噌を取り替えて頂戴神さまよ）

取り立ての鮎がおいしい旅の宿　道子
（取り立ての鮎に旅愁を癒される）
免許証忘れた夜の取り締り　同
ニコニコと貸してがめつく取り立てる　露芳
テストテストテストで点取虫になり　同
（テストテストで点取虫を育てる）
取材記者プロとしてふと迷い　紘
（取材記者迷う日もありプロとして）
歩を取って角を取られて蟬時雨　文子
取り替えて双子の靴の履き心地　同
（取り替えてみても双子の靴が合い）
水を取り替えたら金魚無重力　同
なんぼなんでも取締らなあんな恋　静観堂
取払った恋人の写真淋しい写真帖　同
（恋の写真取り払ったアルバムの空虚）
取り立てがうまいと花もたせ　静子
（抜群の取り立て振りとおだて上げ）
年を取り短気は損気とよくわかり　正則
（年取ってみて短気は損気だとわかり）
人が良いだけでは取柄なしとされ　同
（人の良さそれが取柄とはならず）
帽子取るそこまでの距離気が迷い　紀美代
気晴しに車の免許取る二浪　同
（カー免許取って二浪のうさ晴らし）
取り急ぎましてと続く美辞麗句　カズエ
下取りのテレビを送るドアを開け　同
（名残惜しう下取りテレビ見送る目）
取捨選択捨てた不覚を悔いている　静泉
取引きのチャンス談笑で待っている　同
（取引きのチャンスだ談笑惜しむまい）
絵葉書に語らせ先ずは取敢えず　大成

撞木とも鐘とも取れる友を持ち　同
鏡見るたびに若さは吸い取られ　同
（さびしくも鏡に若さが吸い取られ）
（若い気を無情な鏡に吸い取られ）
突然の夕立珍蝶取り逃がし　紫宏
（俄雨にくや珍蝶取り逃がし）
取り巻きがいるから背のびやめられぬ　翁童
（取り巻きの手前が胸を張っている）
取っても取ってもこの庭草の執念さ　サヨ
（雑草の執念鍬取る手を噛う）
年を取ることも忘れて日日稼ぐ　落猿
（働き者年を取ること忘れはて）
無学さが取り入る技術磨き上げ　伊津志
何処という取柄無いのが又取柄　頼次
（取柄がないからのんきな日日である）
（取柄はないが酒という友があり）
取り入ってみたに損をしたおいら　凡九郎
（苦心して取り入ってみたが損をした）
青写真平の意見も取り入れる　本蔭棒
（末席の意見も取り入れ青写真）
茶の免状取った手つきで茶碗割り　無名
（茶の免状取ったその手が茶碗割り）
お気の毒ねえと取るものちゃんと取り　同
苗取りに年に一度の話しあり　真砂
大家族取りしきる妻美しい　日日子
点取虫が過保護の親を喜ばせ　度
取急ぎ一筆なるほど走り書き　無人
取られる身になってバランス考える　静枝
取入れへ猫も欠伸する刈取機　岳麓
サラリーの手取りが軽い税の国　藤持
いらいらとする日のパチンコまた取られ　篤史

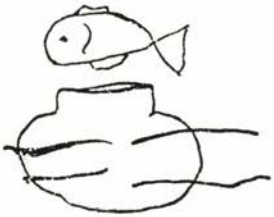
取引きの条件のんで来た不況　保夫
一と押しが効かず取引き持ってかれ　軒太楼
籠の鳥知恵の出ぬまま年を取り　秀村
取替えが利かない腰の蝶番　露杖
よく喋る割に取留めない話　同
忠告も馬耳東風のお取り込み　貞祐
取り入った上司が突如ご栄転　同

取引はしたく倒産はこわく　瓢太
有名税よと取沙汰一向気にしてず　同
取急ぎご返事までと断られ　利美
先取りの会費へ万障繰り合わせ　同
勘違いお面一本子に取られ　同
横取りをされた話の腰を折り　慶彦
毛並みよいだけが取柄のごくつぶし　同

親切の深入り変に受取られ　同
遠慮なくマイク突き出す取材記者　誓二
（ますますご健吟を祈る）

題—和—八月二十日締切（十月号発表）
宛先　岡山県倉敷市下津井一—九—三四
本田恵二朗

近作



今治市　月原宵明

定年は故郷にいびつの家が待ち
黙秘する咽喉へ冷たい茶を流す
花嫁の母身に覚えあり泣かず
大陸川柳作家同窓会
初対面活字の友はもう身内

大洲市　米沢暁明

わが娘もう一人前の宿浴衣
残業をねぎらう月見草のゆれ
捨てるなんて私　惚れてもいないのに

岐阜市　市川鱗魚

宝石に無縁貧しさほめてやる
愛不実ネオンは罷り通る嘘
セールスの戦果輪に吹く日のたばこ
やぶさかで無いがと針をさしておく

東京都　池口呑歩

マンネリにこれでも作家かと思い
マンネリの自分を叱りつつ平和

今治市　長野文庫

金脈は誰オープンへ飛ぶ噂
ふる里に住み巾のない浮き沈み
本当の年を指圧が云い当てる

第二百八十九回（五十年度第七回）

大萬川柳

「疎遠」入選発表

選者　川村好郎
投句総数　五百十句
入選　六十三句

入信を説かれてからの疎遠なり　和歌山　幸

八方へ疎遠つづきで儲けてる　大阪　十止庵

賀状出すのもてれくさいほど疎遠　笠岡　古庵

何よりも無事が証拠の無沙汰がち　大阪　好一

お土産に云いわけさせて来た疎遠　富田林　維久子

明日の風吹くにまかしている疎遠　八尾　弥生

栄転と左遷それからの疎遠　笠岡　忠三

疎遠には出来ぬ秘密を握られる　貝塚　つき子

久方の便りは無心という下地　堺　一舟

今にして疎遠を悔いる師の訃報　藤井寺　吸江

入院でもしたら息子ら来るやろか　宝塚　静馬

法事にも呼ばぬ身内にされている　大阪　文秋

千円で疎遠うずめる日の安堵　大阪　柳信

疎遠したお詫びが先に出る見舞　鳥取　日満

疎遠などふっ飛ぶ握手の温かさ　神戸　静泉

どちらさんとも疎遠ローン終るまで　堺　天笑

ある疎遠心をほぐすペンを執る　堺　緑水

落ちぶれた噂を聞いている疎遠　兵庫　可住

バーからの疎遠を誘う電話切る　和歌山　与史

香典を送りそこねてから疎遠　倉吉　弘朗

麻雀か恋か近頃寄りつかず　大洲　暁明

過去は過去疎遠にならぬ賀状書く　鳥取　豊生

貧乏ひまなしと疎遠を軽く逃げ　大阪　一栄

こだわった面子へ疎遠の隙間風　寝屋川　度

クラス会校歌で疎遠吹き飛ばし　神戸　どんたく

お互に疎遠を許しあえる仲　大阪　繁子

何気ないひと言疎遠の種をまき　岡山　翁童

法要が疎遠な身内集らせ　和歌山　佐知子

籾殻と疎遠になった生卵　松江　登美也

主治医とも疎遠になった顔の艶　大阪　貞祐

順調の時は互いに疎遠勝ち　和歌山　福水

故郷の墓が疎遠を許さない　名古屋　曲ん手

手土産が要るほど友とも疎遠なり
汚く貯めて世間から疎まれる　大阪　誓二

会葬の席で詫びあってる疎遠
ふる里へ飾る錦のない疎遠　堺　ひろ子

故郷の記事貯めて疎遠でいる不遇
生活の差ついていつしか文も絶え　堺　一二三

出不精筆不精同士だから疎遠
ライバルに負けたくやしさから疎遠　奈良　保夫

目と鼻の距離で疎遠になった意地
こちらから出さねば返事ない疎遠　富田林　花梢

再婚の父へ疎遠の日がつづき
ご無沙汰は賀状で詫びてそれっきり　西宮　多久志

欠席を消して疎遠の詫びを添え
おもわくをつつみ疎遠の顔がくる　寝屋川　小路

中元とお歳暮だけのおつき合い
見解の相違疎遠の日を重ね　郡山　カヅエ

友情の限界知ってから疎遠

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチックス
積水化学
本社　大阪市北区宗是町1

ご無沙汰はお互いさまの久し振り
落ちつけば便りをするとそれっきり　尼崎　利美

気易さにいつか疎遠になっている
行けば又叱言と知っている疎遠
長々と疎遠を詫びた無心状　大阪　柳宏子

佳句

遠のいてゆく愛かける橋もなし　今治　宵明

年賀状疎遠の友をたしかめる　鳥取　紫宏

生前の疎遠を詫びる目が赤い　堺　緑水

立候補の噂疎遠を埋めにくる　倉敷　素身郎

小さい意地張って疎遠の壁つくる　倉敷　里風

再会の握手に疎遠の過去はない　八尾　美幸

人ノ句

いい方にとって疎遠の人思う　堺　緑水

地ノ句

金策へ疎遠の人も指に折り　大阪　満津子

天ノ句

受けた恩いつかいつかでいる疎遠　鳥取　日満

選者　吟

別れたい無沙汰と男気がつかず

昭和五十年度　ベストテン（六月現在）

一	一二三	一四、五	堺	一二	吸江
二	可住	一四、〇	兵庫	一三	あいき
三	好一	一三、〇	大阪	一四	利美
四	美幸	一二、五	八尾	一五	柳宏子
五	多久志	一二、五	西宮	一六	宵明
六	小路	一一、五	寝屋川	一七	牧人
七	弥生	一一、五	八尾	一八	洋々
八	つき子	一一、五	貝塚	一九	柳志
九	翁童	一〇、五	岡山	二〇	文秋
一〇	緑水	一〇、五	堺	二一	維久子
一一	花梢	一〇、〇	富田林	二二	白梅子
				二三	梁水
				二四	美子

一〇、〇	藤井寺	以下略			
一〇、〇	大阪				
九、〇	尼崎				
八、五	大阪				
八、〇	今治				
八、〇	神戸				
八、〇	鳥取				
八、〇	大阪				
七、五	大阪				
七、五	富田林				
七、五	笠岡				
七、〇	倉敷				
七、〇	東大阪				

昭和五十年度第九回

「なぞ」　五句以内

締切　八月二十五日

第十回

「ほとぼり」五句以内

締切　九月二十五日

投句先

〒590　堺市堀上緑町一の三の七

藤井一二三方

大萬川柳係

夢のハワイ観光

日米交歓川柳大会

日　時　昭和51年1月21日（水）から、1月26日（月）―5泊6日。

場　所　ハワイ

旅行費　十八万四千円

旅行社　近畿日本ツーリスト

主　催　ハワイウイロー社・川柳塔社・団長　若本多久志。会計　板尾岳人。会計監査　西尾栞。地域委員　西田柳宏子、野村太茂津

申込方法　第一回申込金三万円。あと毎月例会において一万円宛積立、（昭和52年3月まで）

申込締切　昭和50年9月末日。5月以降申込の方は来年一月例会までに十万円になるように積立。

参加資格　本社関係の人の推薦で誰方でも参加できます。

参加申込者―若本多久志・西尾栞・菊沢小松園・橋高薫風・島居百酒・野村太茂津・若宮武雄・板尾岳人・藤岡花梢・岩田美代・和田維久子・天正千梢・垂井千寿子・内芝としよ・宮西弥生・太茂津夫人・小松園夫人・薫風夫人・金谷和子・伊藤ご夫妻、樫谷漫柳・八木摩天郎・児島与呂志・玉置重人・塩満敏・大路美幸・栞夫人・三井酔夢・藤村〆女・黒田真砂諸氏

×

参加者にはパンフレットを差し上げ、詳細ご通知しました。なおご不審の点は幹事までお問い合わせください。

柳界展望

（原稿締切毎月末）

大陸川柳同窓会―左から小田二十貫、東野大八、石原青竜刀、西尾栞諧氏（日満氏撮）

▼中島生々庵主幹は11月3日開催の「昭和50年度文化祭川柳大会並第10回川柳文化賞贈呈式」の宿題「再会」の選をされる。詳細次号で発表。

▼東野大八氏（美濃加茂市）は7月7日の路郎忌句会の講演に来阪、本社へ来訪。日川協の大井正夫氏も来社ここで生々庵、小石ご夫妻や一三夫、葉子さんと歓談後、以和貴荘へ出席された

▼大阪府知事黒田了一著「川柳・知事百面相」を第62回誕生日に出された。―八百万の重荷にびんの白髪増え―了一。

▼第6回北日本川柳大会が8月10日午前10時半から富山県社会福祉会館4階大ホールで開催。兼題―大胆・のんびり・違反・うっかり・目的・焦り・独占・（二句）本社同人伊藤茶仏氏も選者で出席される。投句料五百円、締切7月31日―投句先富山市豊川町3～7松岡緑朗方川柳えんぴつ富山の会。

▼第4回北陸小松川柳大会が9月28日に小松市小馬出町小松市公会堂で開催。本社から「生涯」茶仏選、「別れ」薫風選ほか。詳細は次号発表。

▼被爆30周年第19回広島平和祭川柳大会が8月10日午前10時から広島市大州二丁目13―8大州学区集会所二階ホールで開催。兼題―扇子・欠伸・蟬・冷蔵庫・塩昆布・露・頂上・川・夏やせ・魂（二句）投句7月31日締切、広島市西条局私書箱15号広島川柳会石原伯峯宛。

▼源氏忌川柳大会が8月3日午前10時から吉海町公民館で開催。題―約束・若さ・言葉・強い・再起・相談・勇気・ひとり。投句横4センチ縦20センチの句箋―三百円封入―吉海郵便局村上明達宛。

▼時の川柳六月号は第8回東洋樹川柳賞贈呈川柳大会記録。あの日の盛会ぶりを誌上で再開させている。

▼ふあうすと川柳社の編集室移転―〒657神戸市灘区稗原町4丁目2―20吉野瑛二方ふあうすと川柳社編集室（投稿・投句・通信・交換誌は上記宛）

▼大阪市文化祭川柳大会の打ち合わせが6月27日午後2時から中央公会堂地下3号室で開かれた。菊沢小松園氏と橘高薫風氏が本社から出席。（詳細次号）

▼市川鱗魚氏（岐阜市）日川協加盟の文字も時の流れを感じ路郎先生を思い出します。同人の方の投句が多いだけ報恩につながります

▼林明春氏（ハワイ）今年は不景気のためか日本からの来客が少くない由ですが海岸へ行けばゾーリ族が闊歩しています。

▼山村祐氏（東京都）から―大八氏の「路郎物語」や「夢二をめぐる」春三氏、塊人氏の文など興味深く拝読、地下の路郎先生が川柳塔の活躍をよろこんでおられるでしょうと。

▼水谷竹荘氏（大阪市、元同人）は数年前から病院生活をされていたが、半年程前に退院、自宅療養中のところ六月二十四日死去。市場没食子氏や菊沢小松園氏らが旧柳友によびかけ二十六日の告別式には栞氏はじめ鳥ケ辻川柳会の方々が多数参列した。

▽同人の動向△

▼川村好郎氏（高石市）から6月21日は松江で前夜祭。出雲市で路郎先生が四十年前に一泊された紙屋旅館で一泊、22日午前文芸大会で講演、午後川柳大会では柳話、やっと玉造温泉で解放、同人諸氏にお目にかかれよかったと思いました。

▼尼緑之助氏（出雲市）から―島根県文芸大会は二百名の盛会、講演の川村好郎氏は大好評でした。

▼大坂形水氏（大阪市）は岡山の備北新聞の備北川柳へ「コーヒー」選を発表。

▼児島与呂志氏（大阪市）は職員文芸誌「なにわ」へ随筆〝一分間の私考〟を執筆。

▼八木摩天郎氏（堺市）は6月21日に堺商工会議所で阪大学友会堺支部総会が開

花　公　栄　社

富田林市富田林町24―4

TEL 07212③2064

かれ「堺の昔ばなしと川柳の話」をされ好評だった。路郎門下の路生、柳秀両教授の句には医師諸氏が耳を傾けられたとのこと。

▼中島小石さん（大阪市）は玉青先生指導の青玲社女性グループ日本画展に出品。7月14日～20日（会場心斎橋のギャラリーミツワ）の一週間、玉青先生も賛助出品されて好評。

▼舟木与根一氏（松江市）は都市開発部企画課長に栄進された。

▼小林孤呂二氏（松江市）は建設部下水道課長に栄進された。

▼浜野奇童氏（岡山県）は〝紋土〟六月号へ東洋樹川柳賞受賞の感想を巻頭に書いていられるが、路郎先生はじめ弓削川柳社を指導してくださった多くの方々のおかげと、美しい心が美しい文となっている。

▼川竹松風氏（高知市）日川協創立記念句会は百三十一名という盛会でした。生々庵主幹はじめ皆様のご後援のおかげです。

▼川口弘生氏（大阪市）春巣先生が明朗句会にお元気な姿をみせてくださいました。耳鼻科というのは子供相手の一文菓子屋のようで動きがとれず路郎忌句会に出席できませんと。なお金一封、編集部へいただいた

▼原独仙氏（出雲市）路郎忌句会には三年連続出席しました。川柳塔独特の雰囲気は私の最大の魅力ですと

▼福浦勝晴氏（岸和田市）は永年勤務したKK東京商エリサーチを61歳の定年退職、引き続き第一種嘱託として勤務される。

▼板尾岳人氏（富田林市）は7月6日に島根柳人を迎え観光ガイド。7日は句会その夜は東野大八氏をはじめ薫風、酔夢、新之助諸氏らと宝塚で一泊。翌8日は大八氏の岐阜へ（薫風、酔夢・酔夢さんの友人で車を運転）諸氏と足をのばされた。

▼林野甦光氏（広島市）退院後だい分身体の調子をとり戻しましたと。

▼永尾英断追悼川柳大会が7月27日12時30分から国鉄大阪弥生会館で開催、「酒」「寺」「偲ぶ」の兼題や故人を語る柳話などで盛会。

▼福井野迷路氏（大阪市・本名信立・医博）は満八十三歳のご高令で7月6日朝4時45分に永眠。8日の告別式は島の内教会でおこなわれ生々庵主幹が柳友を代表して弔辞をささげられた。本社関係から小石、静馬、凡九郎諸氏ほか一三夫葉子も参列した。合掌。

▼藤田軒太楼氏（大田市）から―七月二日に祖母（90歳）が急死したため路郎忌に出席できず残念です。

▽旅　信△

▼西尾栞氏（八尾市）6月6日は大陸川柳同窓会の前夜祭、七日八日はライオンズクラブの年次大会で湯田温泉、萩市。―山口瑠璃光寺から―五重の塔見上げる我も旅の者。

▼大陸川柳同窓会から太茂津、栞、大八、日満諸氏の第一報。第二報は小松園氏から―いつくしまやっぱり西へ陽が沈み。

▼路郎忌句会出席の島根柳人、祥月雪美、町紅、鶴丸遥児、独仙、代仕男、地元から小松園、鬼遊雀踊子、凡九郎、岳人諸氏が万博日本庭園から寄せ書拝受。

▽8月の句会△

▼**堺川柳会・ぶどう狩り句会**―3日九時半から（雨天決行）―題―星・中心・送る・波。会場は富田林駅前広場（弁当持参）

▼**南大阪川柳会**―20日六時から―題―キザ・メリハリ・ナイター・サボテン。会場は松崎町三丁目大萬。

▼**川柳東大阪**―23日六時から―題―送り火・余裕・割り切る・ナイター。会場は東大阪市立中央公民館2F第二集会室。

九日の本社句会は九月八日（月）です

新同人紹介

神夏磯道子（かんがそ みちこ）
―小松園・与呂志・敏―推薦

林露杖（はやし ろじょう）

大塚豊生（おお つか ほう じょう）
―若人・貞山―推薦

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般

合資会社 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL（06）三四五二―四
夜間（06）四四〇八

モンタージュ誰にも似ない顔に出来　万里
親に似て女で苦労する息子　〆女
どっちに似ても億万長者にはなれぬ　静馬
人が人に似ていた話軽う聞く　古方
ご先祖に似て一族がみな禿げる　福水
俺に似たやつがこんなに安定所　緑水
左ききまで似てる父子でスープ吸う　栞
叱っては見たが私の過去に似る　〆女
五十年連れ添って居りゃどこか似る　独仙
似たような暮しへ見栄をはっている　史好
先生の文字に似て来た娘のノート　維久子
よく似てるから成長が恐ろしい　鶴丸
晩年の亡父に似てきて父恋し　多久志
俺に似た子と言えぬのも又うれし　武雄
がまんする事も私に似てきた娘　千万子
上達はせぬが癖だけ師に似る　弘生
似顔絵描きになっても二科をあきらめず　牧人
象の子は象に似ているある悟り　冬二
本物と知らずよう似てるよう似てる　静馬
段々と育ての母に似る恐さ　柳志
許す眼と許される眼といつか似る　冬二
惚れて通うた頃思わせる子が似てる　薫風

兼題「情　熱」　若本多久志選

情熱がこの路郎忌へ足運ぶ　町紅
その情熱弟子に孫弟子受け継がん　古方
残された師の足跡はまだ熱く　武雄
椿姫の情熱ほどに焦れたし　君子
情熱の女の鈴が鳴りやまず　夕花
情熱のもえてた頃を総入歯　栞
情熱の炎に火傷してみたい　千寿子
情熱をワイングラスの底に置く　酔夢
情熱は老いぬ軍手の土はらう　美幸
半生を賭けて無実をまだ叫び　洋々
片すみで咲く情熱を持ち合わせ　葉子
情熱の詩人失恋ばかりして　一三夫
情熱を秘めて小指からませる　敏
情熱はも一人ほしい赧ら顔　素郎
証文もなく情熱の金を貸し　十郎
情熱がほしくて赤いバラを買う　智子
弓引いてからの情熱もてあます　つき子
情熱の父の好物冷や奴　美幸
情熱にもえて闘魚となる女　雀踊子
情熱の過去につながる遠花火　夕花
情熱は涙もそえている苦言　滋雀
かげろうが視線に燃える人となり　鬼遊
ソロバンに合わせて情熱加減する　一ン十
情熱の櫨は止めても止まらない　鬼遊
情熱の過去老残を潤わし　百酒
情熱を花火に賭けた夜の空　いわを
接点に立って情熱どうさばく　雪美
ゴッホの描くひまわりが燃えている　鬼遊
家業継ぐ子で情熱を享け継がず　幸太郎
情熱に負けて女に悔いがない　重人
生きてゆく情熱二人の手が温い　吸江
情熱を空振りさせる待ちぼうけ　小路
情熱の吐く息熱い相聞歌　牧人
情熱に負けそう何も言わずいる　大輪
情熱の男コーヒー代がなし　冬二
情熱の余燼写経の墨へとき　武雄
情熱の詩人愚鈍な妻がいる　十止庵
情熱の男に仮面などいらず　英詩
一行の詩情熱をドッと吐く　美幸
陽焼けした肌に情熱黒光り　鎮彦
情熱へ妻貧しさを口にせず　大輪

一分間の柳論

北川春巣

「川柳はどうして五七五でなければならないのでしょうか？」。かなり以前、かなり古い柳歴の人から尋ねられたことがあった。

「それは反対ですよ。五七五、十七音字を川柳と定義したのですから。柳樽の五七五の句を川柳と名付けたわけですよ。」私はこう答えて、そして後にこう付け加えた。

「初代川柳以後に、柳樽に帰れ、という運動が起こったでしょう。川柳とは五七五だ、という形式は定義付けられていましたが、その内容については、誰も定義していなかったんです。柳樽の句に、滑稽を見てとった人は、川柳は滑稽を詠むものだといい、穿ちを見てとった人は、穿ちを詠だものだといい、また軽るみを詠みとった人は、軽るみを詠むものだと主張しました。しかし滑稽、穿ち、軽るみのほかにも、柳樽の中には色色のバリエーションがあります。それも川柳です。近頃の私たちに分らぬような句も、柳樽の句の展開である限りは、川柳といえましょうね。」

情熱は山があるから山に賭け　滋雀
情熱はただ思い出の中へ閉じ　多久志

兼題「立てひざ」　川村　好郎選

爪を切る娘の立てひざたしなめる　思月
立てひざで飲める友こそうれしけれ　吸江
お女将まだ立てひざのくせ抜けきれず　明朗
お互に立てひざとなるヘボ将棋　吸江
立てひざの情緒浮世絵だけのもの　武雄
立てひざのとこから拝む盧遮那仏　小松園
立てひざで恩師のポーズ真似てみる　一三夫
立てひざは主張を変えぬ構えよう　美代
立てひざの方が王将逃げている　小路
立てひざをしてから口調荒くなり　清女
立てひざで席を蹴る時待っている　文秋
ホロ酔に立てひざも出る宿浴衣　柳宏子
立てひざで口説かれている朝鮮語　柳志
ジーパンが立てひざをする癖をつけ　千寿子
立てひざの声で押しうり追っ払い　亜鈍
立てひざの女鉄火な過去を持ち　修史
立てひざの男の邪心覗かれる　滋雀
立てひざに顎を埋めて失意の日　肖二
立てひざの娘へ世代を知る無言　多久志
立てひざに心決らぬ顎をのせ　幸太郎
立てひざのまんまポルノは向きを変え　遥児
立てひざの女冷たい過去をもち　町紅
立てひざで酌いで女将のテクニック　柳志
内職のない立てひざがくたびれる　弥生
立てひざに説教されている正座　天笑
立てひざをする娘に見えぬ訪問着　一ン十
立てひざを抱いても考え浮ばない　柳宏子
立てひざのロダンは何を考える　雪美
立てひざの威勢で流行るろばた焼き　快哉
立てひざも男の毛脛は絵にならず　静馬
立てひざ叩いて最后の碁譜となる　与史
立てひざを崩し本気になってくる　牧人
立てひざの女おんなの意地を見せ　洋々
立てひざになって花札負けが込み　登美也
酔ったなと知る立てひざになったとき　日満
立てひざがあぐらになったパンタロン　清女
女房の立てひざ浮世絵にはほど遠し　蘭
立てひざになって急所をついてくる　花梢
立てひざで寝る夜もあり流転　弥生
金策の立てひざ何時か寝てしまい　鬼遊
あくまでも強気立てひざ崩さない　大輪
別れ話立てひざのまま聞いておく　好郎

兼題「寝転ぶ」　菊沢小松園選

六法を読んで寝転ぶ癖が付き　曲ん手
寝転んだ息子が亡夫写しだし　柳信
レール枕に寝転んだろうかとおもい　日満
部屋一ぱい寝転ぶ子等をもて余し　どんたく
時は金などと寝転ぶ癖があり　登美也
寝転んでばかりも居れず職さがす　水車
幼ごころの反抗寝転ぶこと覚え　軒太楼
寝転べば畳も冷たい失意の日　多久志
ひじ枕思案のつかぬしびれよう　鎮彦
寝転ぶときのうの罪が重くなる　冬二
寝転んでいてもやっぱり腹がへり　緑水
寝ころべば枕出す母ありがたし　快哉
寝ころんでみる妻の顔あたたかし　冬二
寝転べば芸者にサシミ食わせられ　摩天郎
ねころんだ芝生で明日を考えず　美代
寝ころべばそこまで降りる山の雲　眉水
二十四時女ねころぶひまがない　千万子
寝転んで居ても大臣肥えるなり　鶴声
寝ころんだ友もやっぱり出世せず　喜一
寝転んでからの話にトゲがあり　北山越山
ほんとうに困りゃはったか寝転ろばず　一舟
金策のほかは転んで考える　天笑
寝ころんでも女に隙のない姿　肖二
人妻が寝転ぶあきらめかも知れぬ　美幸

第18回近県川柳大会

▼日　時　9月7日（日）受付9時より出句締切12時
▼会　場　竹原福祉会館（閉会予定16時）
▼兼　題　母・太鼓・爪・約束・坂・眼鏡・音・二人・命（各2句）
（特別課題・当日1題）
▼会　費　800円（発表誌、軽食ふくむ）
▼表　彰　広島県知事杯、学生賞ほか20位まで贈賞
▼投句締切　8月31日まで—用紙は巾4㎝長さ19㎝、裏面に雅号。三百円（切手代用）同封されて〒725竹原市竹原町田中　山内静水あて
▼主　催　たけはら川柳会
（静水氏がご病気の通知を受けております。大会成功へご協力のほどを—）

寝転んだ姿で海老は揚げられる　一三夫
寝転んだ観音の手の置き所　万里
寝ころべば雲の中にも浮ぶひと　好郎
寝ころべば畳平和な音がする　町紅
寝転んで夫婦対話らしくなる　維久子
すねたのがいつかほんとに寝てしまい　滋雀
寝転べばトンボ真上を通り抜け　酔升
寝転んだ母の小さい足のうら　十郎
寝転んで妻のぐちから逃げている　つき子
寝ころんで二人の話は銭のこと　千梢
寝転んでいたばっかりに勘ぐられ　緑水
寝転べば総理も同じ邪魔なひと　一舟
寝転べばやっぱり齢の顔となり　吸江
出戻った姉に寝転ぶ場所がない　十郎
気がかりは父が寝転ぶようになり　史好
寝転べば足の下なる天の川　小松園

兼題「雲」　西尾栞選

空青く雲も孤独の日なるべし　日満
去来する雲が詩となる独り旅　曲ん手
歳月は父を許して雲晴れる　酔夢
茜雲別れ言葉がまだ言えず　〆女
威勢よい舟出をさせたいわし雲　誓二
食パンに見えた日もあり雲を追う　天笑
恋人に逢う五時半の雲にのる　天笑
雲と語るに補聴器などいらぬ　静馬
その昔紫雲たなびく大八州　鬼遊
雲きれて思い違いに気付きだす　智子
負け犬に雲ばかりある田舎道　北山越山
相剋の人生にも似て雲乱る　美幸
行く雲の流れにそうて山頭火　一三夫
夕焼けのここに極まる雲の彩　緑水
音のない村に祈りのいわし雲　悦郎
雲低く疑惑たやせぬ国境い　頂留子
雲流る果てに別離の人が居る　文秋
坑内夫明日の生活に雲を見ず　代仕男
雲つかむ話責任もなく消える　小松園
ホームシックへ母を作ってくれた雲　とよ子
噴煙か雲か山なみハイウェイ　塊人
雲の上スチワーデスと瞳が出会い　喜風
雲の峰七月七日の彩になり　一三夫
雲白く白く全快の部屋を出る　喜一
雲掴む話も欲しい不況風　十郎
雲でさえ怒れば雹を叩きつけ　一ン十
七月の雲キャンバスへ白く塗り　柳志
球場に雲一つない始球式　史好
出雲路に神話おもわす雲が湧き　快哉
過保護から逃げてゆくのかちぎれ雲　夕花
師の君が雲の峰からVサイン　敏
雲はゆっくり昔話をしてくれる　智子
雲の字の上に二階の俗世界　漫柳
欲張って株の雲行き踏みはずし　儀一
根回しの金雲行きをこうも変え　一二三
山男雲の流れにさからわず　岳人
雲流れおんなも流れつく祈り　冬二
雲の峰輝き蟻に野心なし　酔々
雲百態父のありかは重なりて　素郎
大阪の空で汚れた白い雲　雀踊子
私は雲かも知れず風動く　凡九郎
雲はいつも他人の顔で語りかけ　小松園
頂上でくっろぐ視野に雲の峰　百酒
雲行きがあやしくなって妻正座　与史
ふる里の雲はお喋り話好き　大輪
その人を追うシルエット雲に出る　弥生
雲に乗るといちびり出す孫悟空　一三夫
キノコ雲生涯語る母として　酔夢
雲素直みなメルヘンの主人公　古方
おおらかに雲は国境越えている　武雄
（進行・**柳宏子**―記録・**鬼遊**―整理・**庸佑**）

川柳塔社常任理事会（7月4日）

毎月のことだが、まず多久志民から会計報告がある。どこの柳社も同じことだろうが同人費や誌代が〝切れる〟とすぐ送っていただくこと、数回連絡して返事のない場合は適当の処置を運営委員会がとることになっているが、諸事情をお察しのうえ諸氏のご協力をお願いいたします。

ハワイ吟行のすべてがきまった。はじめの企画より七万円以上安くなっている。詳細は参加諸氏に印刷物配布ずみ。

今秋の大阪市文化祭川柳大会の兼題選者に橘高薫風氏、席題選者は菊沢小松園氏ときまる。

出席―多久志・百酒・静馬・栞・いわを・生々庵・太茂津・薫風・小松園・岳人（ハワイ吟行幹事）一三夫諸氏。

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

南大阪川柳会　金井　文秋報

弱者にも陽差しは隔てなく届き　一二三
弱き者我等貧しき者の名か　あいき
弱者とは俺のことかと知る老後　柳志
弱い者いじめするなと睨みつけ　儀一
金脈をあばく弱者の群れに居る　肖二
弱い者大樹の蔭も落ち付けず　柳宏子
手入れした顔がまってる舞台裏　好一
手入れした自転車軽い口笛で乗り　正彰
手入れする髪へ鏡が憎くなる　雀踊子
よく手入された人間紳士です　岳人
手入れする刀に祖父の血が通い　君子
嘘のない語りであくびさせるだけ　十止庵
学園祭ママに買わせる汁粉券　静香
学園の誇り野球に勝っただけ　文秋
横顔が似ててスナップ怪しまれ　滋雀
心して坐るスナップ撓けそう　弘生
未来図へ胸ふくらまして居る二人　思月
ふくらめば風船空に夢があり　喜風
人口のふくらみ読んでいたスーパー　形水
風船へ頬べたの方がようふくれ　一栄

堺川柳会　河内　天笑報

炎天を気にせず歩く儲けロ　恒明
チャンスないままに歩いてきた焦り　笑痴
駅までのバスを横目に万歩計　小路
終点のない道自分なりに歩く　千万子
浮草稼業骨を埋める土地もなし　徳子
ひとり子のお骨小さな音で泣き　柳信
骨のある男で定年など待たぬ　十止庵
子の好きな魚に小骨多すぎる　花梢
一片の骨雄弁に語りかけ　天笑
映写機の中であらためて見た自然　維久子
欲望の花は自然をかき乱し　儀一
自然からはなれ人心狭められ　宏子
脱都会素足の土に逢いたくて　つき子
不自然な男で小さな罪をもつ　雀踊子
不自然が自然となっている惰性　美代
自然美をほめる湯殿の客の下駄　摩天郎
地下街へ来て方角をごまかされ　一舟
風船が逃げそこなった地下の街　鬼遊
何不足ない学歴で地下へ逃げ　一二三
幻を追うて虹の街歩く　牧人

高知川柳社　川竹　松風報

真心でガイドは旅を楽しませ　みつ子
案内の通り廻って指定席　暁耕
宴席へ酌婦社長を従える　マコ
案内の旗が待ってる駅におり　佳月
潮干狩昨日来た子が先にたち　二三
頂上へ約半キロと掲示板　清流
闘争の先頭を行く子に育ち　蟠蛇
氏よりも育ち娘に品があり　紀十人
艶のある調度品ばかり新夫婦　芽一
別々の故郷がなつかしい夫婦　恭一
お点前に女王も和む古都の庭　十面子
子が笑い妻がほほえむ夜の膳　松風
国訛り二つ覚えた旅帰り　天花
春に逝く花のすべてを友として　窓花
老眼の奥で時代の娘を見つめ　長子
倖せのデート柳が揺れてます　寛
買い替える前の時計で遅刻する　顕童
愛の重さにふっとでる吐息　秀子
新任の先生親の目でテスト　勝子

ハワイ川柳ウイロー社　林　蒼蛇楼報

肩もんで上げれば母は舟をこぎ　拝山
老いたれど今も瞼に母が居り　公女
母の形見届いて涙新たなり　彩珉
母なればこそ不幸も共に泣いてくれ　万里歩
母となる娘に母は産着縫う　河舟
懐かしや覚めにゃよかった母の声　紅渓
子の為に涙かくして諭す母　稠雄
遠く来てしみじみ思う母の愛　小雪
金釘の母の手蹟に滲じむもの　峯円
ママの声そのまま人形叱りつけ　風影
母の味生かして運ぶ妻の膳　一つ葉
「母の日」の膳立てやはり母がやり　暁舟
顔知らぬ母の墓前に湧く涙　蒼蛇楼
母親もつい欺される子の涙　快夢起
旅だより母へは太い文字で書き　三石
古稀になる母がまだ居て嬉しい日　雪女
子供より母が疲れた学芸会　北海
母と子で米寿と古稀の二重奏　秀山
死んでから心に生きる母となり　カロ女
限りなく思い出つきぬ母の愛　エス子

川柳東大阪　竹中　肖二報

馴れ合いの言葉のはしにあるにごり　雀踊子
納品の馴れ合い受領印がない　鎮彦
馴れ合いと知らぬ他人が気をもんで　思月
馴れ合いの答弁だから実が入らず　綾月
加減乗除所詮馴れ合い処生だす　凡九郎
馴れ合いで禁酒をさせる医者と妻　好一
情報に真相と云うデマがあり　文秋
内幕は相手の方が知りつくし　柳宏子
情報に浮き足立っている地盤　恒明
情報を流して相手の出方みる　肖二

後輩が良い情報を持って来る　季賛
情報で刺激求める倦怠期　あいき
ご好意に甘え福祉の杖頼る　喜風
素直さが世間の好意ひとりじめ　柳信
きっかけを掴めば幸運なと云われ　正彰
バッジまだ本雇いから見くびられ　儀一
逮捕されても金バッジ胸を張る　誓二
集団でバッジは個性見失う　度
金バッジの居眠りテレビ見逃がさず　一栄
人よりもバッジ信用する守衛　十止庵

むらくも川柳会　小砂

里の母来る度ごとに白髪ふえ　白汀報
母の顔写生してきた子の笑顔　信朗
表情は同じ事情のありそうな　タケノ
事情あるらしいつもの人が欠席し　マサコ
強引に事情はどうあれ頼み込み　敏明
事情あるらし母の一人旅　潮楽
人話し事情も知らず波にのり　福子
それぞれに事情があって折れ合わず　みどり
母の愛叱言も入れて来た便り　澄水
男七人育てた母の細い腕　祥月
母の日へありがとうセールの中を撰る　ヨシ子
母にだけ言える話も適令期　秀子
男まさりの母にもあった女の目　文子
夜更けまで晴れ着縫う母如来めき　信夫
今一度素顔の見たい日を約し　蓮露
当選の声にはならず低姿勢　孝華
フラッシュに囲まれダルマに目を入れる　明朗
当選の祝宴末座はもつれ出し　一郎
複雑な事情とさとり貝になる　とみ子

どんぐり川柳会　谷垣　史好報

妻の打つ太鼓時々みだれ打ち　白汀
大詰めの太鼓へ女死を思う　サヨ
目に余るものにロビーの登山靴　弥生
安いから余分に買うたのが残り　薫風
憲法は大臣閣下の手に余り　儀一
過疎の村一駅原野に余してる　酔々
重文の太鼓は極彩色に鳴り　痴亭
有り余る金が煩悩もてあまし　ゆきを
あり余る髪肩がこる未亡人　百酒
奉納の太鼓は寄附の高で鳴り　恵美子
最初から余る予算を組んでおき　小松園
社長だけひとり喋って会議すみ　瓢太
便箋の端に気になることを書き　好郎
便箋も白紙を添えた日のゆとり　いわを
独断で丸くおさめて知らぬ顔　喜風
あり余る闘志だから汗となる　吸江
あり余るほどは廻って来ぬお金　岳人
独断の父の涙を見てしまう　真砂
独断がゆるせぬ線を越えて行き　美幸
あり余る金ではないが貸してくれ　重夫
店にある便箋統計表となり　鬼遊

オーエスケー川柳会　大坂　形水報

受験生深夜コーヒーの香り立て　前田
妥結せぬ会議のコーヒにがく飲み　常夢
コーヒーもけんかの後のほろにがさ　健坊
胃半分切ってもコーヒはやめられず　聖地
積木しながら育っていく根性　亜成
裏窓は知っているのか四季の花　鱒
裏窓に気をもむおさげの影絵出来　博泉
裏窓にすがる我身のやるせなさ　秀川
裏窓と裏木戸にある秘めた恋　みどり
裏窓の明りが消えた片想い　一扇
平社員軽重問われる身でもなし　栄
オーケーを軽くされたで不安がり　千夢
口軽い女噂に火をつける　弥生
どっちみち軽い中身と開けて見ず　形水
裏窓のない部屋に住む独り者　入仙
腰軽いだけが取得でいまだ平　好郎

菜の花句会　高杉　鬼遊報

甘い話に罠があるとは限らない　夕花
兄の名がちょっぴり不服なぼくの本　幸生
銀行の計算一円に夜が更ける　正彰
犯人の髪型に似た気の悪さ　紀美代
傷心へ甘い言葉がつきささり　岳人
一冊の本に思想がつめれてくる　花梢
美しく老いたい女に髪がある　雀踊子
喪が開けてからの瞼に新芽もゆ　弥生
漱石を読み清張を読み二浪です　牧人
計算が苦手で世渡りうまい人　頂留子
宿題の計算ママに間違われ　儀一
教則本ピアノの上であくびする　綾女
甘いパパだから教育ママが居る　肖二
満員車小さな善意割り込まれ　史葉
こんなに飲んだか料亭の計算書　誓二
運命線開いてすぼんで開かない　美代
人生開眼女にあったそんな辻　凡九郎
今晩のおかず料理の本が泣き　敏

佳句地10選（前月号から）

高鷲亜鈍選

洪笑の軸に私の影がある　八笑人
春浴びるちんぽこもうすぐ満一才　文晴
トルコ石の深い青さにひそむ謎　綾女
人間の歴史求めてる虫眼鏡　寛
嫁ぐ娘へもう一人娘欲しくなり　武助
駅長の帽子の下の顔になる　亜成
息切れに耐えて流転にある気骨　滋雀
客足もたえて夫婦にかえる店　政夫
春闘に遠く地下足袋泥まみれ　十止庵
子の注射親の祈りを共に入れ　和幸

白髪染め女は消えぬ火を守る　十止庵
長髪の男お早ようさんと言い　鹿蔵

川柳後楽（岡山県）　井上柳五郎報

共稼ぎスタミナも女房と分ち合い　定恵
生活のゆとりを見せる共稼ぎ　楽遊
共稼ぎはずみがついた暮しむき　廉
共稼ぎ夕焼雲に励まされ　鮟虎狼
共稼ぎ大きな夢をあたためる　秋月
恩給の目減り生きる工夫する　哲郎
生きていた十年前の詫証文　熙
母性愛女に生きて捨てた過去　柳五郎
妙薬へ生きる執念耳を立て　たけ志
亡き父の言葉が生きてる曲り角　胡風
タイミングへ刑事はまだ時をかし　博友
かたい肉口に入れれば指名が来　照路
タイミング見てミスを報告し　佐加恵
価値のないごみにお金がかかり過ぎ　昌吾
ゴミどもを集めて町の取締り　勝
日曜日ごみ焼く煙まだつづき　久米雄

和歌山七面句会　中筋　三幸報

妹としての交際ゴールイン　勇次
妹に似ている土産の竹人形　和美
妹と想い涯てない恋とする　武雄
喪服着る妹あまりに若過ぎる　知也
妹を叱れば姉と組んでくる　太茂津
どたん場へ母は事件の鍵を出す　冨子
妹の気性無口な姉が妬き　ふく代
リハーサル充分女王の御到着　みゆき
母逝きし星なき夜よ義兄妹　凡夫
妹の婿の遅いを母案じ　悦生
初孫のクシャミ一つも大事件　宏
人望を買われ祝辞のリハーサル　利明
リハーサル人工月はそこに出て　光治
金脈の重さに事件つぶされる　政夫
ライバルを意識しているリハーサル　澄子

惚気ともとれる妹の愚痴をきき　佐知子
中卒の妹からの為替くる　三幸

川柳大阪　児島与呂志報

選挙ポスター人相だけは嘘云わぬ　太茂津
ポスターを見直している発売日　季賛
ハイハイと云って自分の意志通し　呑文利
平均に生きて可もなく不可もなく　鶴丸
平均点越えて見合いが発車する　重人
平均にまだまだ遠い我が暮らし　誓二
金使え使えとポスター揺れている　胡蝶
女王様歩く処に平和あり　秀峰
母性愛夫に巧くつけ込まれ　喜酔
不景気の風にポスター負けて散る　漁人
平均点努力の跡をほめてやり　雅巣
どぶ板の音も詩人はうたにする　本蔭棒
旅プラン雨に好かれる友がたて　敏
母のない詩を小さな目で綴り　笑風
エリザベス女王の微笑に美濃部負け　眉水
陸橋をのぞけば都会の詩がある　道子
汚す掌に明日をささえる詩がある　六竜子
口許に詩がこぼれて嬉しい日　洛酔
じょさい無い女でつまら無い女　与呂志

川柳たけはら　森井　菁居報

両眼をもらって堕落した達磨　静水
帰る娘へ布団ほかほか干して待つ　房子
さあ春だよと自分自身に言い聞かせ　蘭幸
棟扇一家揃って手を合わせ　文晴
棟上げる槌音夫の声響く　笑子
おぼろ月褥に包むぬくもりか　紫光
馘首なき掌なれど十指を風が抜け　不朽
無理をしなければ貝の砂を持つ　政己
たまさかの郵便受けに請求書　峰泉
三年生そろばんお習字いそがしい　愛
子供には言えぬ値上げの保育料　そのみ
やんわりと言われそうかいなと思う　菁居

暇かこう河原の石が渇ききり　一路
鏡見る日は病院へ行く日なり　貞子
風が笑うても妻の白髪を抜いてやろ　のばら
過去持って少年Aの気も判り　英詩
エンジンに夢あり碧い海に生き　美佐雄
インフレの風がきびしい五十路かな　かつ子
まず母を味方につけた作戦図　酉合
七人の敵に笑顔で迎えられ　扇水
何はともあれ若さを妻は失わず　季賛

駒つなぎ川柳会（大阪市）　岸　南柳報

てれ隠し乙女心の生返事　つとむ
つや消しでおます吟行会の雨　育園
艶消しの漆器の奥に光る艶　綾女
つや消しのボディゆったり来る外車　肖二
たまさかのデートにコブが付いて来て　石捨
見賞えがあってお名前聞きそびれ　南柳
こけ落ちた頬父の髭そっと剃る　規一朗
ほほ紅をつけてうっとりまだ若い　茂子
お人形がママに似てると頬をよせ　儀一
よい方のほほ笑み見せてライト浴び　鎮彦
やせこけた頬が苦労を物語る　柳信

暑中お見舞い
申しあげます
50年盛夏
関西奇術教室
校長　村田瓢太

頬打った愛のつよさにある悟り　宏子
頬冠り踊りの中に溶けて行き　正彰
頬ついていやな想い出ばかりなり　摩天郎
頬の傷が矢張り静かに暮らさせず　潔
聖書には頬の打ち方書いてある　岳人
頬紅をつけてはたちの日を祝い　恒明
頬杖をひまな男と見られけり　信義
頬ずりをされて血圧狂い出し　小路
頬と頬二人に暦などはない　小松園

川柳ささやま　河原みのる報

急報を待ち兼ねている達磨の目　百合子
黒枠が賞罰ナシの顔で笑み　みのる
平凡でよかったことを悟る齢　淡水
尼寺に悲しいロマンス置いてくる　喜美代
ヘルパーにねたきりロマンス語りかけ　宗珠
かりそめのロマンスそっとして嫁ぎ　素水
ロマンスをよみがえらせた過疎の春　れい子
二人居るだけでロマンになる砂丘　可住
泥んこに孫もせわしい農繁期　つや子
機械化で忙がしいのはお金だけ　近江
忙しさまだ不足らしい役を受け　孝
人生を考える暇なし日は暮れる　無鬼

京都塔の会　松川杜的報

街道の歴史また消すハイウエー　王石
改めて言うたら得心してくれず　求芽
苦労して幹事選んで来た粗品　誠史
ブレーキを効かせば車は横を向き　季賛
囀りのこぼれる岩に潮が満ち　笛珠
僕だけにわかる片言孫がいる　客遊子
通じない言葉へ遠慮のないマイク　白渓子

二賞発表句会と同人総会は
10月5日(日)　会場未定

針のある言葉をまるく聞きながす　明代
この町の誇りは死亡0続く　飛鳥
行きずりの旅の言葉を大事がる　水客
祖母達者花嫁なみのスケジュール　杜的

川柳たましま　稲田豊作報

企らみの種を握ったまま敗ける　八笑人
やわらかい布を柩へ敷こうとする　克枝
地下足袋を洗ってくれる妻がいる　澄子
底を見る顔で打算の鬼となり　千翁
真実はひとつ曲げられてはならず　慶子
種芽吹く愛は天にも地にも満ち　豊作
紙魚に負けまい受験子辞書を喰う　成行
潔白であるだけ我慢出来かねる　麗水
気だらぬも息子の出来を人がほめ　笑門
野良猫の首をつかんで愛に負け　静海
夢の種枯れても枯れても蒔いている　誠一
真実を知った少年花を折る　林鶴
鯉のぼりひとりぐらしを覗くなよ　安静
出せば出る気合をグッと肚に貯め　扇水
辻褄がぴったり裏のある話　里風
どの帯にしようか妻の若返える　秀子
星の眼の射抜く真下で恋をする　耕水

虹川柳倶楽部（唐津市）新岡回天子報

豊頬に田植の泥の村小町　照沖
お一人様一個その手はもう食わぬ　広坊
十字路を信号無視の燕飛ぶ　実
養殖のホタルをやっと見る時世　文隆
田植には帰すと言って嫁にとり　一竿
買いホタル自然にはなすも虚無の空　筒井
アナキスト産業破壊で身の破滅　畑中
ホタルの光蛍を知らぬ子が歌い　五木
お田植えの神事受けつぐ農の国　勝一
飯焚きも田植の中の紅だすき　虹汀
わが位置を知らせて蛍夜を飛ぶ　三男
白いすねまじり帰省の子も田植　三日造
機械化に腰の痛みのない田植　崟志朗
ししょごきょう読めるか蛍光らせて　回天子

城北明朗句会　川口弘生報

花が散ったと思やたちまち立夏なり　春巣
タクト振る妻に女が消えている　太茂津
たこうついた付録のような二日酔　小路
太陽にすまぬと思う物も干し　誓二
尋ね人他人事などと云うとれず　弘生
畳むにも母の手を借る訪問着　百酒
建売りの柱の細さ気にかかり　満津子
丹前に着かえて旅の夜のスリル　牧人
頼られてから長男は趣味を捨て　十止庵
宝くじ売る寡婦小さな夢がある　美幸
大安の今日は大役負う袱紗　ますゑ
ためらわず割込んで来たデカイ尻　右近
田に水を満して過疎にも夢がある　智子
タンポポへ蝶々は道聞きに寄り　三十四
太陽の光をビルに吸い取られ　濁水
恋人に別れた気持桜散り　繁子
考えるつもりで鮮かいている　生仏
野仏もうつらうつらと春陽浴び　つね
雨降りも雨の降らない虹の町　秀村

三井が丘川柳会　高田博泉報

ネクタイの好み妾（わたし）にまかされる　亜也子
労務者が群がり食入る掲示板　博泉
鉄筋の壁抜けきれぬ夜の日記　亜鈍
背信のネクタイ締めて朝を出る　一扇
ネクタイゆるめ窓開けにゆく夜勤　亜成
ネクタイを締めて呉れる迄贈ります　てまり
古ネクタイ満員電車週刊誌　二松
日記から血液型の違う訳　世山
限りない夢が綴ってある日記　〆女
掲示板二浪よさばうれし泣き　静歩
雨雨雨日記帖まで濡れそうな　薫風

本社八月句会

日時　八月七日（木）午後六時
会場　以和貴荘（いわきそう）
阿倍野区松崎町二丁目
電話622・1275番

兼題　柳話　西尾栞（今月の出題・板尾岳人）
「車窓」児島与呂志選
「原稿」本多柳志選
「秀才」八木摩天郎選
「黒」正本水客選
各題三句以内厳守

席題　二題　当日発表
会費　三百円

★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20
川柳塔社

9月の兼題　「地図」「象」　「童話」「ひらめく」

・募集・

十月号発表（8月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）菊沢小松園選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「里親」藤田軒太楼選
「新刊」辻白渓子選
「利息」木山遠二選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十一月号発表（9月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）菊沢小松園選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「夜」柳楽鶴丸選
「紅葉」藤岡花梢選
「平和」吉田圭井堂選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳美をご使用ください。

規定はお守りください

定価三百円（送料十六円）
半年分　千八百五十円（送料共）
一年分　三千六百円（送料共）
昭和五十年七月二十五日印刷
昭和五十年八月一日発行
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　藤原童心社
郵便番号　542
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
発行所　川柳塔社
電話大阪・二七一—三九八五番
振替口座　大阪・三三六八番

たのしさ ひろがる お買物
阪急
大阪梅田本店
千里阪急
神戸三宮支店
東京大井店
数寄屋橋阪急
京都営業所
ロスアンゼルス阪急

・ペンペン草・

麻生路郎物語

★東野大八先生の「麻生路郎物語」を本にしては、という声が多い。高鷲申鈍氏からもお電話をいただいている。ご本人は「こういう本は売れないよ」とつかえめだが、大変な労作である。ことほ、読、東奔西走、毎号の取材に時間をかけておられることは誰にでもおわかりいただけるとおもう。

百人一首と川柳

★富士野鞍馬先生の「百人一首と川柳」も原稿をいただくことに頭が下がる。八十歳を越え、まだ古川柳の研究に没頭されているのである。「今」「源氏物語」五十四帖と取り組んでいますが、原文を読むのに平安語で晦渋を覚えます。とお便りをいただいた。二ページ読むには数分間とかからないだろうが、先生のこのご苦労を忘れないでいただきたい。

同人特集

★本号は「戦争はイヤだ」を特集した。執筆者諸氏は悔いなく戦った人たちばかりなので書きづらかったようである。が、防衛問題が論議される今日、敢えてもう一度、考えてみるのも無意味ではないとおもう。

福井野迷路先生逝去

★7月6日午前4時45分、元海軍々医中将医博信立・福井野迷路先生が亡くなられた。昨年三月十五日かぎりで開業医としての第一線から勇退され悠々自適の優雅なご生活だった。軍医には大将がないので中将閣下といえば最高の方である。かつての大阪の師団長は中将だったが、そんなえらい方と川柳あればこそお近づきになれたことを身にあまる光栄と日頃から思っていた。映画や芝居で見た乃木さんのような風格があり、しかも洗練された都会派の方でもあった。

煙草も文房具

★路郎先生が編集中によくタバコをすわれた話をされ「あんたもそうらしいが、タバコを吸わないと仕事がはかどらんかね」とおっしゃったことがあった。そのとき、ぼくはつきのようなことを申しあげたようにおもう。「仕事中は孤独なので、もし対話する相手があるとすれば、それはタバコのけむりでしょうか。そういう意味では、ペンや原稿用紙と同様、煙草は第二の文房具といえましょうね。」あとで気がついたことだが、それから以後、毎月のように20コから30コ、煙草を届けてくださったので悪いことを申しあげたと思った。昨年暮れには、よし子夫人が編集部へお見えになり、葉子さんに三万円、ぼくに五万円くださった。お歳暮にしてはあまりに高額なのでこちらがビックリしてしまった。

心斎橋筋を圧す

★心斎橋筋などでよく散歩中の先生にお会いしたが、あのおのずから備わる威風堂々の風格は、歩く巨城にも見えた。先生は明治25年6月25日生まれで満八十三歳である。先生が三十歳、（大尉時代）よし子夫人が二十四歳の時に結婚され、金婚を数年前に迎えられ、まだまだこれからのお元気だったのに……。南区医師会の会長を生々庵主幹がされていた関係で、年一回の秋のバス旅行に参加をゆるされ、野迷路先生ともご一緒させていただいた。――日本がもし戦争に勝っていたらぼくなど先生とお話もできなかったはず…合掌。

★**暑中広告にご協力感謝。**

（不二田一三夫）

食べすぎ・のみすぎに

新タケダ胃腸薬

効能―食べすぎ、のみすぎ、胸やけ、二日酔い・悪酔いによるむかつき・はきけ・嘔吐に。

☆3包錠…27錠・60錠・150錠　☆顆粒…16包・40包

タケダ

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十年七月二十五日 印刷
昭和五十年八月一日 発行（毎月一日発行）
川柳塔 八月号
定価 三百円（送料十六円）

乗用車専門販売店

NISSAN

尼崎日産自動車株式会社

取締役会長 若本真彦

〒661 尼崎市尾浜町2丁目3番27号 電話(06)429—5861(大代)

事業所名	郵便番号	所在地	電話番号
尼崎営業所	(661)	尼崎市尾浜町2—3—27	大阪(06)429—5861(大代)
尼崎中古車ギャラリー	(661)	尼崎市大西町3—8—20	大阪(06)426—3751(代)
伊丹中古車ギャラリー	(664)	伊丹市千僧2—6	伊丹(0727)79—3961(代)
宝塚営業所	(665)	宝塚市旭町3—2—6	宝塚(0797)84—2300(代)
西宮営業所	(663)	西宮市下大市東町11	西宮(0798)52—1121(代)
西宮中古車ギャラリー	(663)	西宮市若山町78—1	西宮(0798)65—3963(代)
神戸営業所	(653)	神戸市長田区2番町4—2—1	神戸(078)577—0223(代)
西脇出張所	(677)	西脇市寺内492—1	西脇(07952)2—4152(代)
淡路出張所	(656)	洲本市下加茂1-1-86	洲本(07992)2—7353(代)
垂水出張所	(673)	神戸市垂水区伊川谷有久	伊川谷(0789)74—2781(代)
神戸サービス工場	(652)	神戸市兵庫区小河通8—5—2	神戸(078)575—5256(代)
灘中古車ギャラリー	(657)	神戸市灘区岸地通5—3	神戸(078)801—5111(代)
明石営業所	(673)	明石市船上硯町2—1—10	明石(078)923—0234(代)
篠山営業所	(669-21)	多紀郡丹南町牛ケ瀬29	丹南(07959)4—1171(代)
篠山中古車センター	(669-23)	多紀郡篠山町郡家田中の坪842	篠山(07955)2—0603(代)
姫路営業所	(671-02)	姫路市御国野町国分寺56—1	姫路(0792)52—4181(代)
三田営業所	(669-13)	三田市新士1610—1	三田(07956)2—6501(代)
加古川営業所	(675-01)	加古川市平岡町高畑537—1	加古川(0794)23—3144(代)

HORAI

551

蓬莱商品の目印

アイスキャンデー

あずき・パイン・ミルク・チョコ

ソフトクリーム

バニラ・ミックス・チョコ

蓬莱

大阪・なんば

《出張販売》高島屋 そごう・阪神
松坂屋・京阪デパート・奈良近鉄百貨店